

これに近接して完形の土師器皿があったことから、ここに意図的に置かれた可能性も考えられよう。この下方から出土した杯についてもほぼ完形品であり、これら甕周辺にあったものが流れたと想定される。土師器皿・杯はいずれも赤色塗彩され、124・125は内面に暗文が施される。これら遺物から7世紀後半の年代が与えられよう。(中森)

遺構外出土遺物 (図51、図版29-4、32)

遺構外出土の土器はD3グリッドを中心にまとまっている。ここには土器溜があることから、それと関連するものも含まれている可能性がある。

132～136は須恵器で、このうち134・136はC区出土。132は壺の口縁部で、口縁外面に2個並んで円形スタンプ文がある。133は小型の壺、あるいは横瓶であろうか。135はやや高い高台をもつ杯である。土師器は137～142で、139・141がC・D区から出土した。137は蓋で、端部が尖り気味になる点で、127と異なる。138は薄手の杯。139は土坑38と関連するものか。140・142の甕は土器溜出土例と形態的に異なり、同時期のヴァリエーションを示すものの可能性もあろう。また、D3グリッドからは砥石(S11)も出土している。S12は滑石製の紡錘車。

このほか鉄滓が3点あり、このうちC区では流動滓が出土した。調査地周辺では平安時代前期に比定される名和乙ヶ谷遺跡で流動滓の出土例がある(註1)が、それよりも時期的に遡る可能性をもつものとして、この地域の鉄生産開始時期を考える上でも注目されよう。(中森)

(註1) 中森 祥・浅田康行編 2003『名和乙ヶ谷遺跡』鳥取県教育文化財団



図48 土坑38および出土遺物



fig.6 土器溝遺物出土状況（南から）



- ①暗褐色土（IV層相当）
- ②黒褐色土（V層）
- ③黒色土（②層よりも暗い。V層相当）
- ④褐色砂質土（砂礫多量に含む、地山）
- ⑤灰褐色粘質土（VI層）

図 49 土器溜遺物出土状況

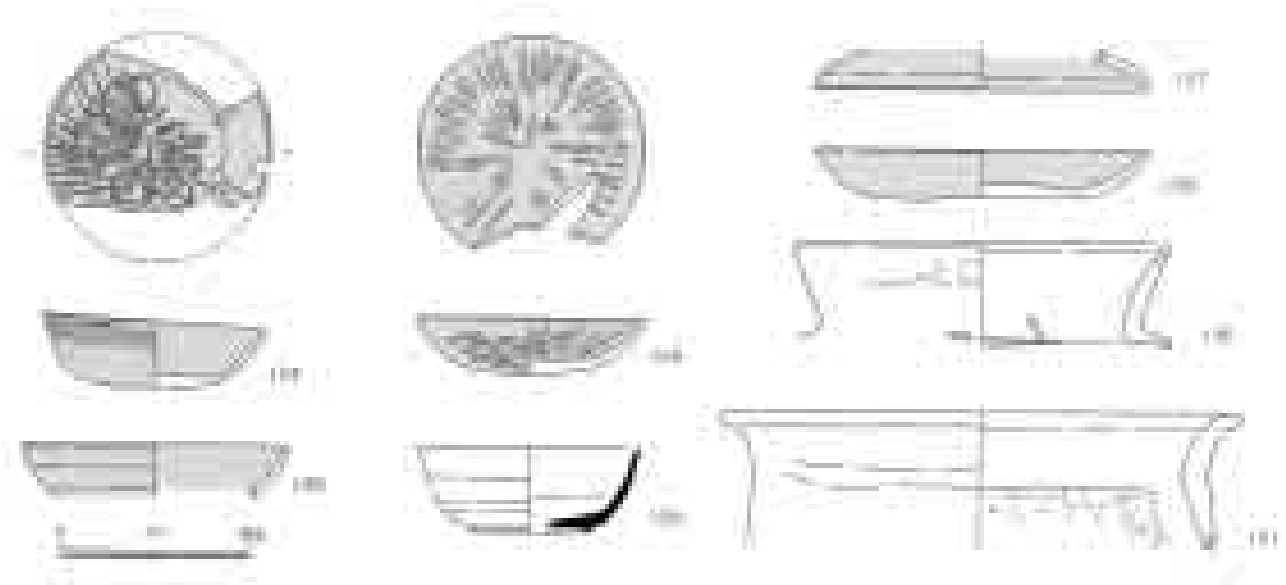


図 50 土器溜出土遺物

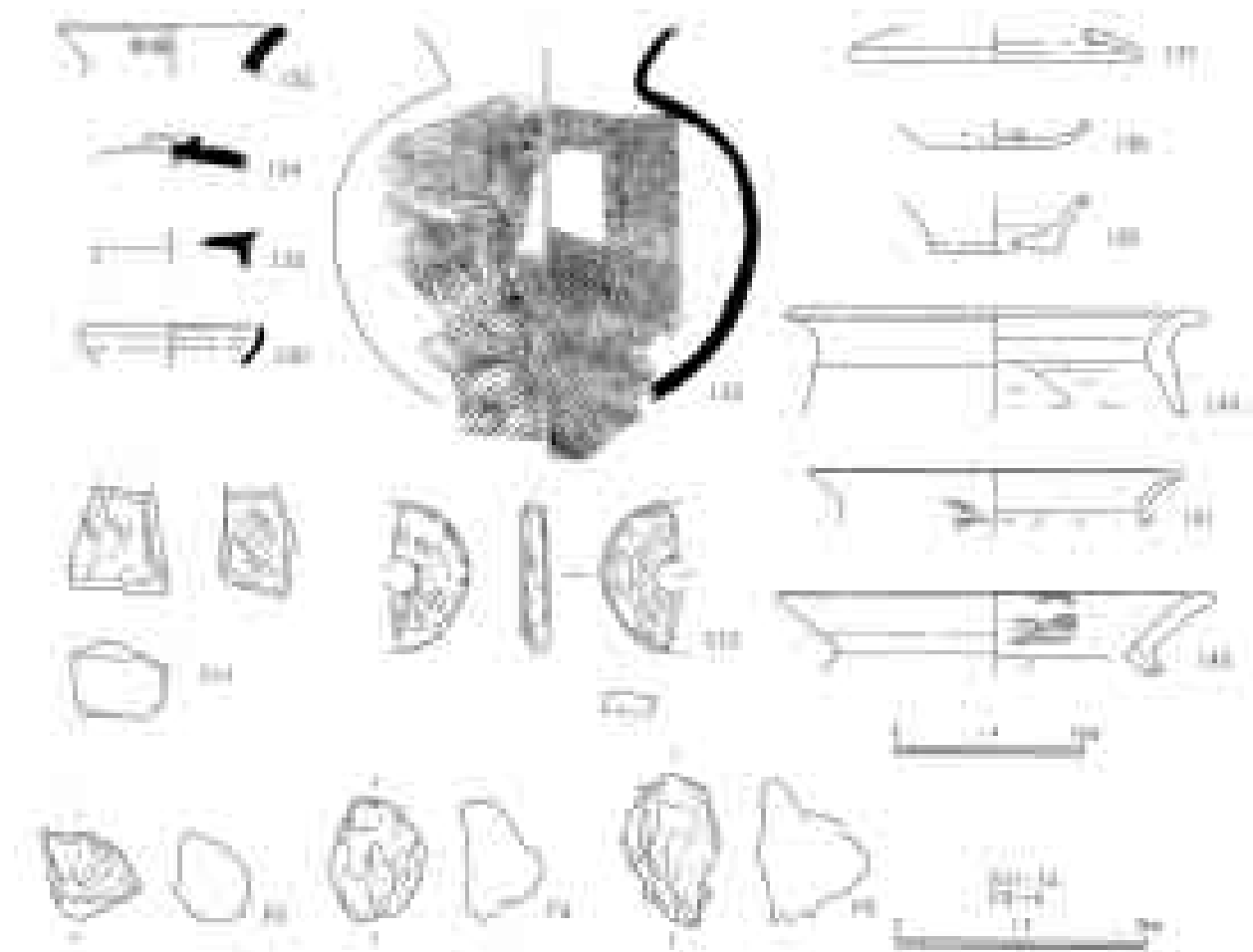


図 51 遺構外出土遺物

表8 古墳時代後期～古代土器観察表

※・検出品、△法存数、()44西経

No.	図 No.	名称・層位	層位	位置 (m)		特徴	土器 種類	色調 外内	法存 数	備考
				位置	層高					
108	44	墓内住居 LL上層	土師器 高床	X 133	△ 4.7	二重口縁のもの。口縁下部の縁部が厚く、口縁部が内側ナガ。口縁部内側ナガスリ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	口徑L15	
109	44	墓内住居 LL上層	土師器 高床	X 142	△ 3.8	口縁部中下でタタキ縁出し、口縁部が外反するもの。口縁部には多少の割れ れている。内側ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L15	
110	44	墓内住居 LL上層	土師器 高床	(X 9.2)	△ 1.5	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
111	44	墓内住居 LL上層	土師器 高床	X 108	△ 6.1	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L18	
112	44	墓内住居 LL上層	土師器 高床	—	△ 13.7	外側平縁。内側内側月ツケ。	密 底好	内外 黄段	—	
113	45	墓内住居 以 内直	土師器 高床	X 172	△ 4.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	口徑L17	
114	45	墓内住居 以 内直	土師器 高床	17.0	△ 7.0	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑219	土器分析資料 27
115	45	墓内住居 以 内直	土師器 高床	(X 9.2)	△ 1.9	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L19	
116	45	墓内住居 9 上層	土師器 高床	X 144	△ 7.7	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L18	
117	45	墓内住居 9 上層	土師器 高床	X 114	△ 9.5	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
118	45	墓内住居 9 上層	土師器 高床	X 158	△ 6.5	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L18	
119	45	墓内住居 9 上層	土師器 高床	X 184	△ 3.4	二重口縁のもの。口縁部が厚く、内側ナガ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	—	
120	45	墓内住居 9 上層	土師器 高床	X 184	△ 4.4	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
121	45	墓内住居 9 上層	土師器 高床	X 234	△ 7.7	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L19	
122	48	土坑38	土師器 高床	X 124	△ 3.4	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L14	底径X 3.4
123	48	土坑38	土師器 高床	X 114	△ 4.0	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L19	
124	50	土層9	土師器 高床	X 120	△ 4.1	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L12	底径L12
125	50	土層9	土師器 高床	12.1	3.1	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	土器分析資料 29
126	50	土層9	土師器 高床	X 140	△ 2.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
127	50	土層9	土師器 高床	(X 17.2)	△ 2.1	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L10	土器分析資料 30
128	50	土層9	土師器 高床	X 178	△ 2.7	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L12	土器分析資料 30
129	50	土層9	土師器 高床	X 108	△ 4.4	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L12	土器分析資料 30
130	50	土層9	土師器 高床	X 200	△ 5.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	—	土器分析資料 30
131	50	土層9	土師器 高床	X 278	△ 7.1	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	口徑L19	土器分析資料 31
132	51	ロ3 2V層	土師器 高床	X 118	△ 2.7	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	口徑L18	
133	51	C・ロ3	土師器 高床	—	△ 19.7	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
134	51	ロ7 2V層	土師器 高床	—	△ 1.9	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	コモリ径3.0
135	51	ロ3 2V層	土師器 高床	(X 8.0)	△ 2.2	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
136	51	ロ3 2V層	土師器 高床	X 100	△ 2.3	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
137	51	ロ3 2V層	土師器 高床	X 154	△ 1.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
138	51	ロ3 2V層	土師器 高床	(7.8)	△ 1.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
139	51	了1U 層	土師器 高床	X 6.8	△ 3.2	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	底径L18	
140	51	ロ3 2V層	土師器 高床	X 228	△ 5.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	口徑L15	
141	51	ロ3 2V層	土師器 高床	X 200	△ 3.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 黄段	—	
142	51	ロ3 2V層	土師器 高床	X 228	△ 4.8	口縁部が外反するもの。口縁部が厚く、内側ナガ。内側ナガスリ縁ナガ。	タタキ タタキ	内外 こぶい黄段	—	

表9 古墳時代後期～古代石製品観察表

A法存蔵

No.	遺構・備位	図 No.	種別	寸法 (cm), g (kg)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重量		
S8	聖穴住居 10c	44		6.0	4.7	2.2	84.0	角閃石(去山岩)	産り石か?
S9	聖穴住居 10c	44		5.0	4.5	2.5	72.0	角閃石(去山岩)	産り石か?
S10	聖穴住居 9上層	46	凹石	13.0	10.2	5.1	75.00	角閃石(全縁母去山岩)	敲打痕あり
S11	D3 IV層	51	積石	△4.1	3.8	2.9		長石(北岩)	
S12	E2 III層	51	積石	6.0	△3.1	1.1	27.0	積石	使用痕あり

表10 古墳時代後期～古代ビット一覧

No	グリッド	土色	最大径・厚さ		底面 高mm
			()法存蔵 cm	cm	
275	18	灰泥色	35.0-32.5	19.9	49.6
276	18	灰泥	53.0(25.0)	23.3	49.6
277	E3	IV層	40.0-34.0	31.1	48.2

第7章 中世前期の調査

第1節 概要

遺構としては、耕作痕と考えられる溝状遺構を谷部のほぼ全面で検出した。このほかのものはA・B区にまとまっており、調査地東側縁部でテラス、耕作痕との関係は不明ながら、土坑やビット、一部掘立柱建物跡を検出した。

また、これらを覆うⅡ・Ⅲ、Ⅷ層からは多くの遺物が出土しているが、土師器・須恵器・瓦葺土器・貿易陶磁器、鉄製品などヴァリエーションに富む。(中森)

第2節 検出した遺構と遺物

掘立柱建物2・3 (図52、図版36・3)

調査地東部、G3グリッド、A・B区の谷東側の尾根部に位置する。Ⅱ層直下、基盤層上面で検出した。ほぼ同位置で建て替えられた建物群である。掘立柱建物3が、2を切って構築される。両遺構とも、遺物は出土していない。土色と形態から、中世前期の遺構と判断した。

掘立柱建物2は、身舎部と両側の縁もしくは廂と考えられるビット列からなる。主軸は西に29°振れており、身舎の規模は、桁行2間(3.55m)×梁行1間(3m)。尺貫法では桁行12尺(2間)×梁行10尺(1丈)となる。柱穴の規模は、径0.2～0.3m、深さ0.15～0.5mを測る。外側の柱穴列は、桁行きが身舎と同じで、身舎から約0.35m外側に身舎と平行して小さめのビットが3基ずつ並ぶ。ビットの規模は径0.15～0.2m、深さ0.1～0.4mを測る。単独では、ビットの細さに対し梁間が開きすぎることから、縁もしくは廂と判断した。

掘立柱建物3は、桁行2間(3.55m)×梁行1間(3.2m)を測る。主軸は、西に26°振れる。梁行方向は掘立柱建物2と平行し、やや平行四辺形に近い平面形態を呈する。柱穴の規模は、径0.15～0.2m、深さ0.1～0.3mを測る。(湯川)

掘立柱建物4 (図52、図版36・3)

調査地東部、G3グリッド、A・B区の谷東側の尾根部に位置する。Ⅱ層直下、基盤層上面で検出した。竪穴住居12を切って構築されると考えられるが、北東隅のビットは検出できなかった。南側のP3～5は、各3つのビットが切り合っており、3回以上の建て直しが想定できるが、北側は、削平が激しく、対応する切り合いが認められなかった。遺物は出土していない。土色と形態から、当該期の掘立柱建物と判断した。(湯川)

耕作痕 (図53・54、カラー図版7・2・3、図版34・35)

A・B、C・D区の谷部を中心に、地形に沿って並行する筋状の痕跡を検出した。A・B区においては埋土にⅡ層とⅢ層相当の2種があったが、検出面は同じであり、それぞれの範囲などを確認するには至らなかった。そのため、ここではそれらを合わせて図示している。

A・B区では2・3ラインのものは谷部に直交する向きで、ほぼ等高線に沿う。だがA区に入り谷が東側へ屈曲する部分から北側の平坦地、およびそれに続く谷西側では南東・北西方向を向き、その中央部には幅1.2mほどの直線的な溝Fがある。溝は大半が0.1～0.2mほどの幅で、深さは0.1m以下である。またA区においてはビットを多数検出したが、規則的な配列は認められなかった。

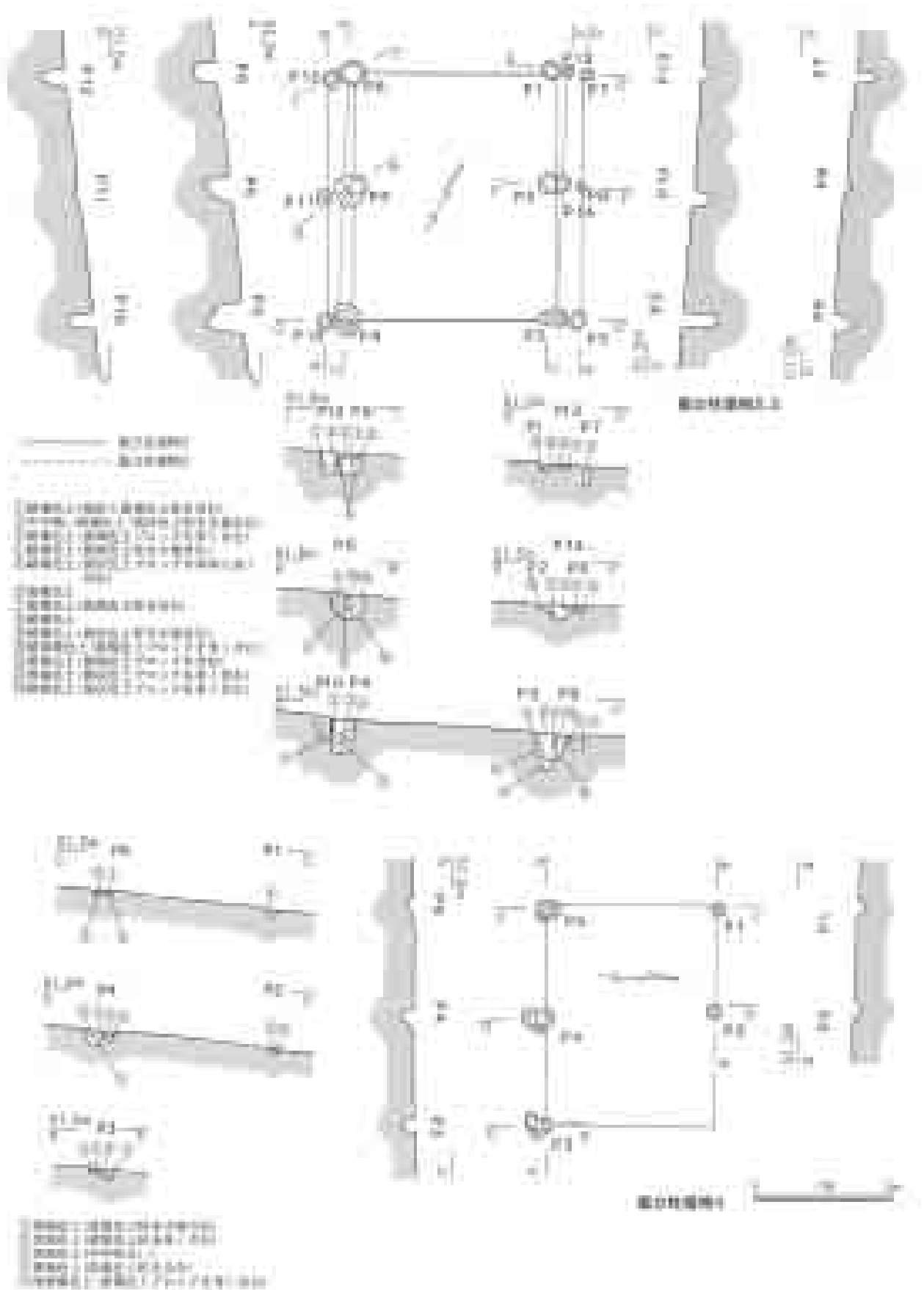


図 52 掘立柱建物 2～4



図 53 C・D区耕作痕

C・D区でも同様な傾向であるが、H9杭周辺ではテラス状の掘り込み（テラス5・6）を確認した。A区のテラス4同様、この周辺には耕作痕がみられない。またテラス5には数基のピットを検出したが、構築物の有無は不明である。

これらを被覆する土（Ⅱ・Ⅲ、Ⅳ層）の自然科学分析などを行なった結果、Ⅱ・Ⅲ層においては非常に多くのプラント・オパールが検出された（第10章11）が、Ⅳ層ではほとんどみられなかった（第10章12）。ただし土壌微細形態からは、はたけ・水田土壌の可能性が高く（第10章10）、また両層ともに類似するもの（第10章9）であることから、これらは耕作に係わる土と考えられる。そしてその下層から検出された筋状の並行する溝は、耕作を行なう際の鋤などの痕跡であろう。

なお、B区では幅0.4～0.6mのやや幅広い溝（溝A～D）が並行してほぼ等間隔ではしる。これら溝は現況で残っていた耕作地畦と概ね重なるため、現代のものがこの時期に開削された耕地を踏襲していることが判明した。（中森）

テラス1～3（図55・56、図版33）

調査地B区東端にあるテラス群。いずれも地山の岩盤を削って形成される。テラス1はB区谷部南斜面にあり、幅5.8m、奥行き2.6mほどを測り、高さは約0.4mである。壁裾部では長さ2.7m、幅0.2mの溝を検出し、また平坦部にピットを2基確認したが、構築物の有無はわからない。遺物は床面からやや浮いてほぼ完形の土師器耳皿(144)が出土した。テラス2はテラス1の南東側に位置し、3段の平坦面をもつ。最下段が幅広い。全体では幅11.5m、奥行き4.2mほどである。また西側には長径1.5m、短径1.3m、深さ0.3mほどの不定な土坑状のものがあり、あるいはテラスへ降りる階段として機能をもったものと考えられる。このテラス平坦面は岩壁を削ったもので、そこには工具による掘削痕が明瞭にあった。

テラス3はA区谷の開口部に位置する。トレンチにより切られるため全体規模は不明だが、検出した幅は5.1m、奥行き4.4mの2段の平坦面があり、下段南東隅では2×1.7mほどの範囲に焼土の広がりがあった。遺物は須恵器甕(145)、土師器壺(143)が出土した。（中森）

テラス4（図54）

E4グリッド南側に位置し、長径6.6m、短径2.4mほどの二等辺三角形状を呈す。東側には耕作痕が密にあるが、テラスの周辺ではそれ以外検出していない。耕作痕との関係性などは不明。埋土がⅢ層相当であったためここに含めた。（中森）

土坑39（図56、図版36 1）

D4グリッドに位置し、長径1.7m、短径1.0mほどを測る隅丸長方形を呈すもので、深さは約0.2mである。埋土はⅢ層相当が厚く堆積し、遺物は出土していないが、埋土から当期と判断した。（中森）

土坑40・41（図56、図版36 2）

E4グリッドの北西隅に位置し、南北軸の土坑41を東西軸の土坑40が切る。土坑40は長軸1.5m、短軸1.0mほどを測る隅丸長形状を呈し、深さは約0.1m。土坑41は長軸1.45m、短軸0.85mほど、深さは約0.15mであった。土坑40とほぼ同形態で、底面までは切られない。遺物は出土していないが、いずれも埋土がⅢ層相当であるため、当期と判断した。（中森）

土坑42（図56）

F3杭の北西に近接し、古墳時代前期の土坑8を切る。長軸は残存で1.0m、短軸は1.2mほどの楕円形を呈すものと思われる。深さは約0.3mで、埋土は3層がほぼ同じ厚さで堆積する。遺物は瀬

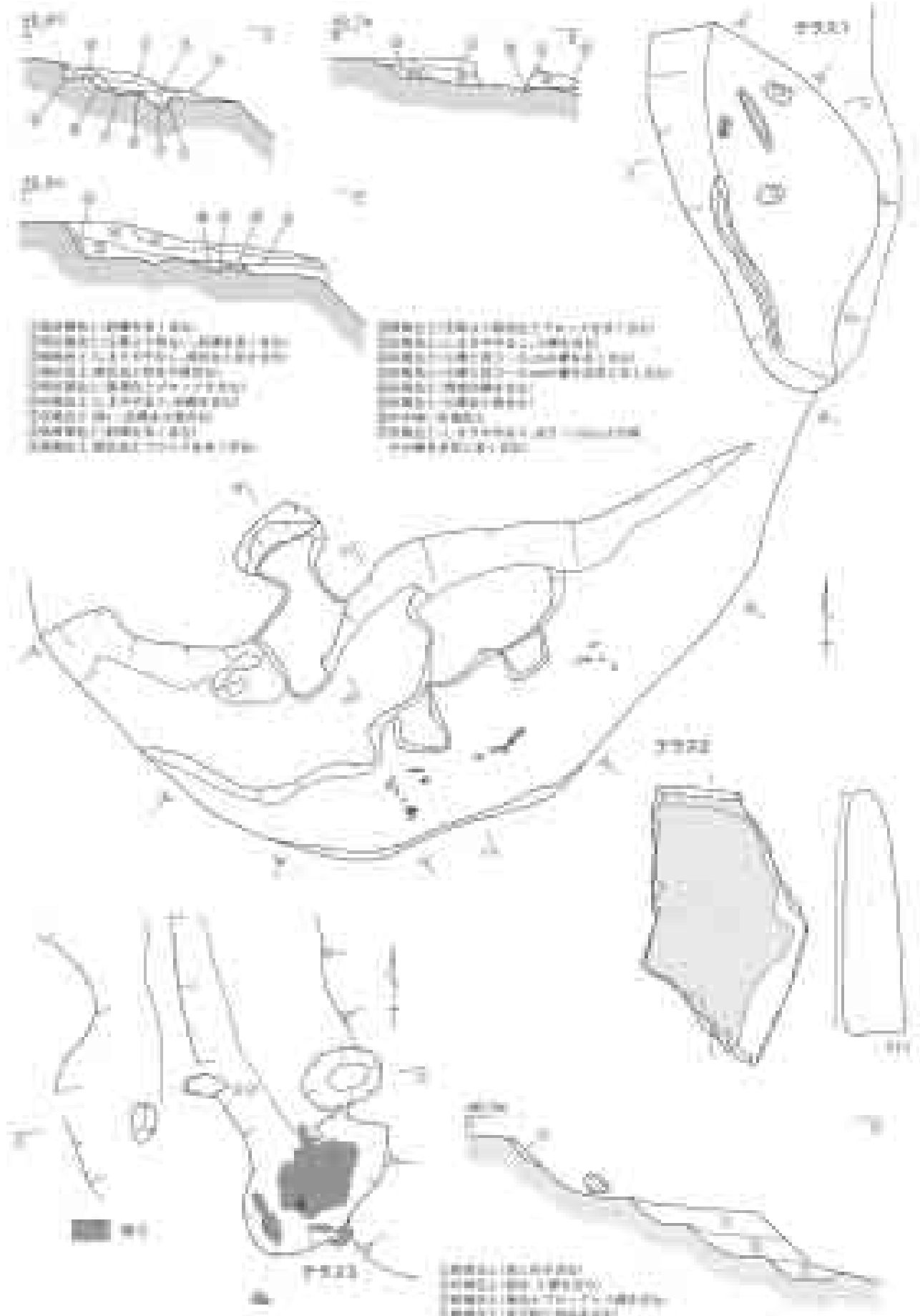


図55 テラス1～3

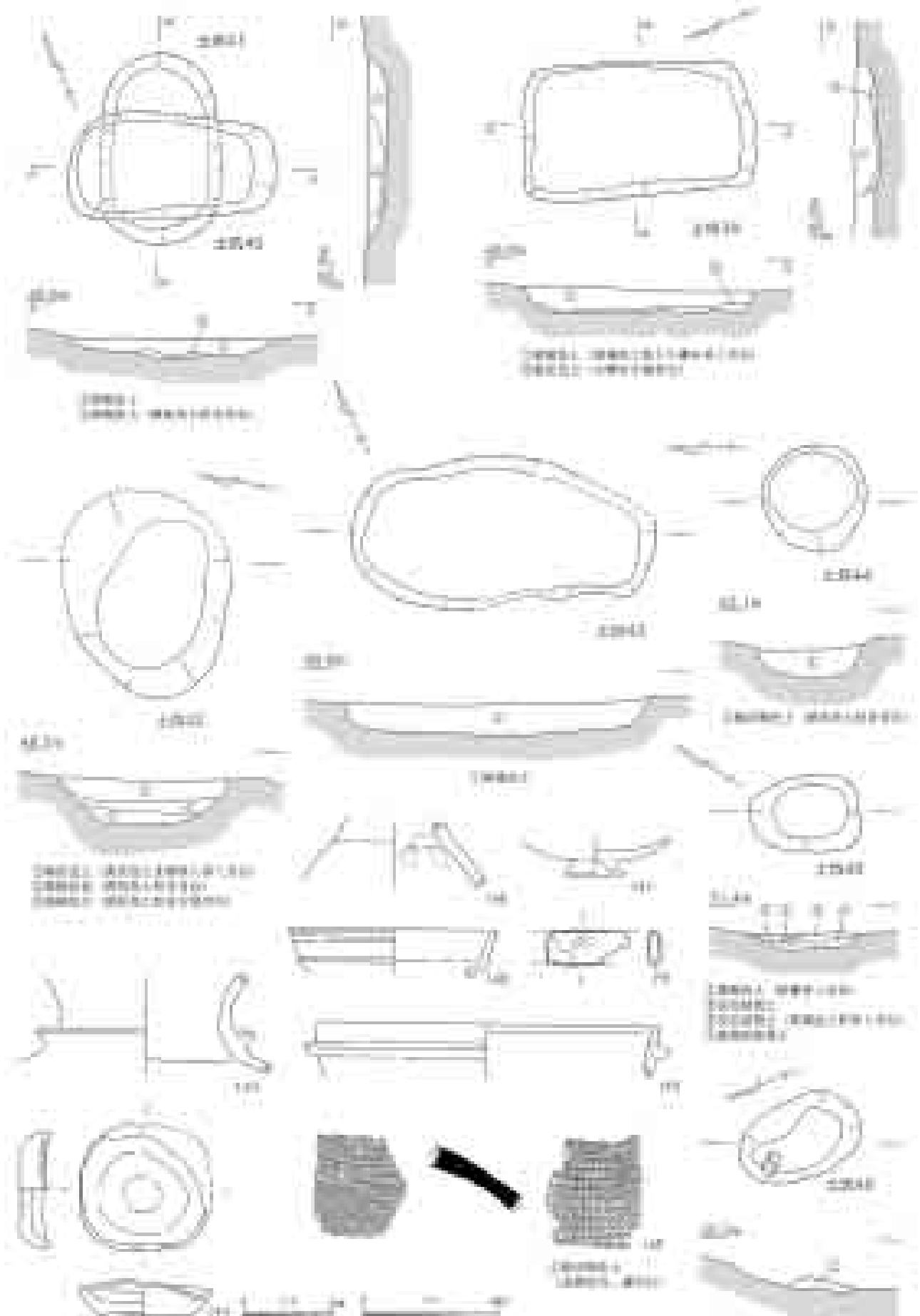


図 56 土坑 39 ~ 46 および出土遺物

戸美濃産壺(146)、土師器甕(148)が出土した。

(中森)

土坑 43 (図 56)

F 2 グリッドに位置する。長径 2.3 m、短径 1.2 m、深さ 0.25 m を測る長楕円形を呈す土坑。埋土はⅢ層相当の単層である。

(中森)

土坑 44 (図 56)

I 9 グリッドに位置し、径 0.8 m ほどの円形を呈す。深さは約 0.25 m で、埋土はⅢ層相当の単層である。遺物は出土していない。

(中森)

土坑 45 (図 56)

H 8 グリッドに位置し、長径 0.8 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 m ほどの楕円形を呈す。埋土は薄い層が互層状に堆積する。遺物は出土していないが、埋土から当期と判断した。

(中森)

土坑 46 (図 56)

J 8 グリッドに位置する。長径 0.9 m、短径 0.6 m、深さは 0.1 m ほどの楕円形を呈す。埋土はⅢ層相当の単層で、土師質の羽釜(149)、刀子状鉄製品(F 6)が出土した。

(中森)

溝 5 (図 57)

K 9 グリッドに位置し、長さ 5.0 m、幅 1.7 m、深さは山側で 0.5 m ほどを測る。埋土はⅧ層相当が主体である。遺物は出土していないが、埋土から当期と判断した。

(中森)

遺構外出土遺物 (図 58 ~ 60、カラー図版 8、図版 36 - 5・37)

遺物の多くは耕作土と考えられる層出土のものであり、ほとんど遺構が検出されていないこととあわせ、大半が他所から持ち込まれたものであろう。本遺跡の北東には同時期の集落跡と考えられる門前上屋敷遺跡があり、遺物相も類似することから密接な関連性が窺える。

貿易陶磁器では白磁が主体を占め、C・D区からの出土が多い。白磁Ⅳ・Ⅴ類が中心で、鎬蓮弁文の青磁碗(161)が1点のみではあるが認められる。この傾向は門前上屋敷遺跡と同様である(註1)。

また土師器では皿・杯類がA・B区にまとまって出土しており、貿易陶磁器と様相を異にする。それらの法量・形態にはヴァリエーションが多いが、概ね貿易陶磁器類と伴うと考えられ、時期幅もあることが窺える。さらに土師器鍋も比較的A・B区からまとまって出土している。口縁形態には受け口状を呈するものと八字状に開

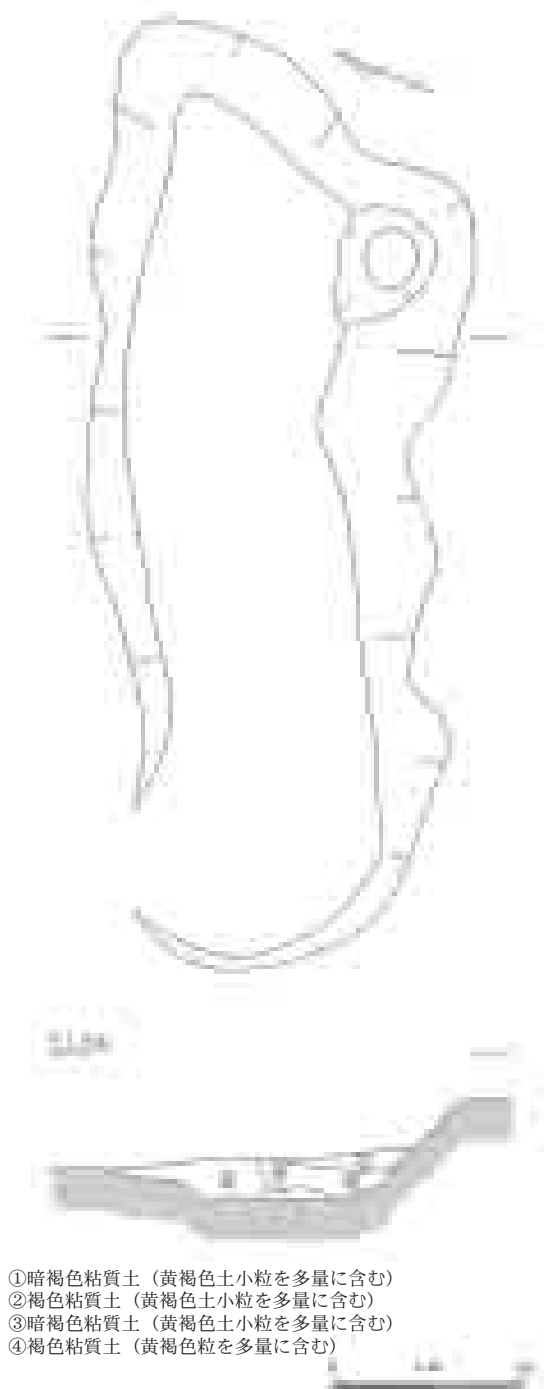


図 57 溝 5

くものの二種があり、量的にはほとんど差がない。

このほか鉄製品、鉄関連遺物もまとめて出土している。製品では鉄鍋片（F 13～F 15、F 28～F 30）が多い。さらに馬鍬（F 27）は本調査地が耕作地であったことと関係するものであろう。また中世後期包含層から3点出土しており、1遺跡から4点が出土する事例は全国的に見ても少ない。中国地方では中世後期の事例（草戸千軒町遺跡、吉川元春館跡）があるが、それより時期的に古いものとしても注目されよう（註2）。本調査地周辺では門前上屋敷遺跡、茶畑六反田遺跡（註3）でやはり中世前期のものが出土しており、それぞれから耕作痕跡も確認されている。（中森）

（註1）森本倫弘編 2005『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団

（註2）松井和幸 2004「馬鍬の起源と変遷」『考古学研究』第51巻第1号

（註3）八峠 興ほか編 2002『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』鳥取県教育文化財団

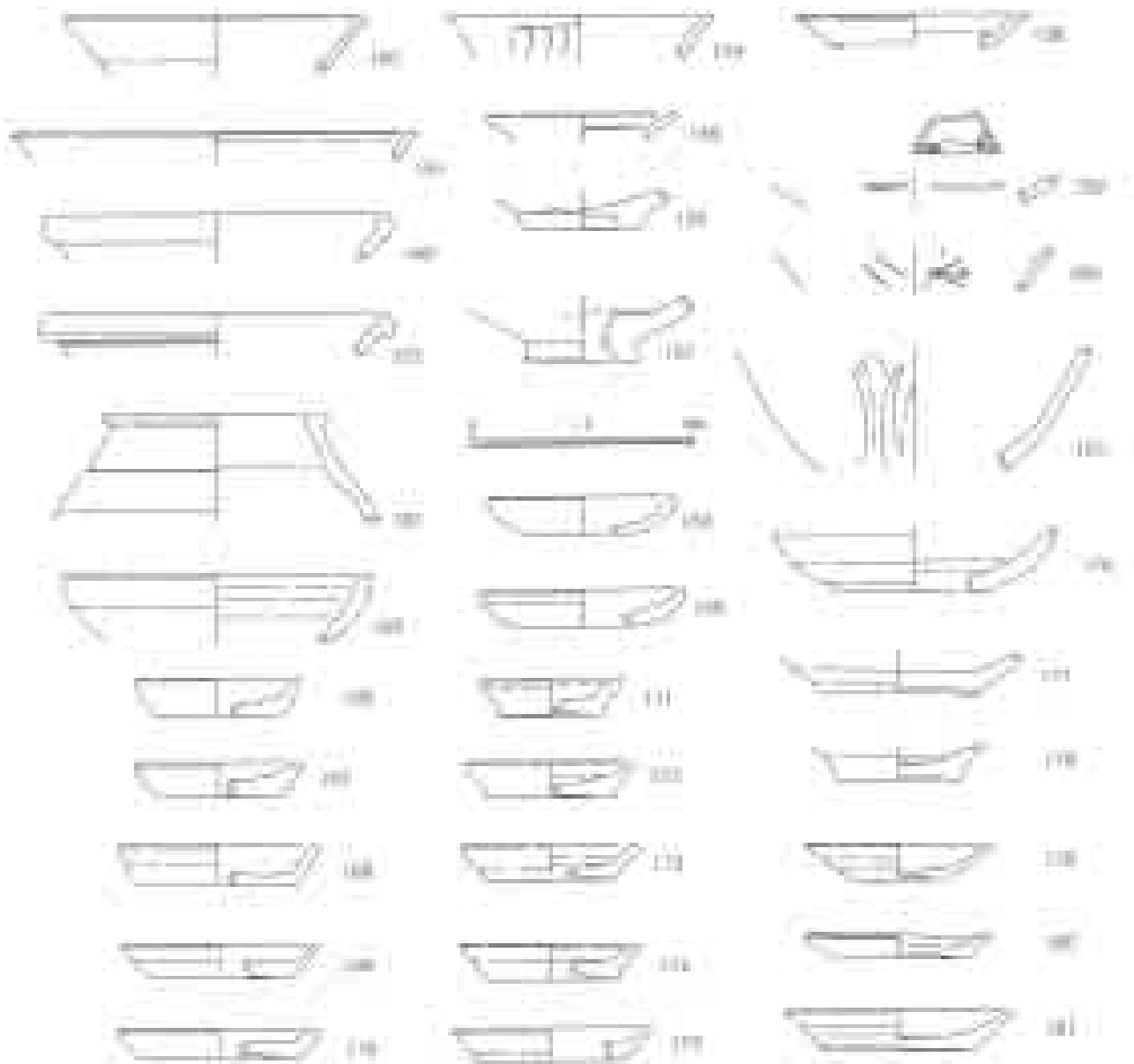


図 58 遺構外出土遺物（1）

表 11 鉄関連遺物、銅製品観察表

△残存値

構成 No.	遺物 No.	図 No.	地区 層位・遺構	遺物名	特徴	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度
1	F2	44	竪穴住居跡 11	鉄製品 (鍛造品) 鋸	幅 2 cm 前後を測る小型の鋸破片。厚みは 1.5mm 前後。右側部は直線状に途切れているが、生きている可能性大。左側部は全面破面。背側はほぼ直線状で、身幅の半分が木部に覆われている。刃部は外観的には不明瞭ながら透過 X 線像では 2 mm 強の間隔をもつ鋸歯状の刃部が辛うじて読みとれる。フィルムによる透過 X 線像が必要。	△ 3.6	△ 2.5	△ 0.3	△ 5.6	3	錆化 (△)
2	F1	44	竪穴住居跡 11	鉄製品 (鍛造品) 鎌	薄板状の鎌破片。左方向に向かい身幅が徐々に狭くなる。左右の側部は破面。下手側の側部は弧状で、やや研ぎ減りしている刃部が。全体に皿状に反っている。	△ 3.7	△ 3.3	△ 0.6	△ 8.6	2	錆化 (△)
3	F3	51	E3 IV層	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	平面形が丸みをもった極小の椀形鍛冶滓。上下面と上手側の側面が生きており、左側部と下手側が破面。断面形は駒形。下面には瘤状の酸化土砂あり。含鉄部は上面より。	△ 3.7	△ 3.4	△ 3.0	△ 43.2	6	錆化 (△)
4	F5	51	C区 IX層	流動滓 (鍛冶滓)	上面が流動状をした特異な鍛冶滓。上手よりの破面には灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土の点在する椀形の面が残る。それ以外は不規則な突出となる。滓は緻密で結晶がやや発達する。	△ 5.9	△ 3.9	△ 4.4	△ 73.5	1	錆化 (△)
5	F4	51	E6 IX層	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄・二段)	上下二段気味の極小の椀形鍛冶滓。平面形は不整楕円。上面は平坦気味で、側部の立ち上がりが急。滓は緻密。上半部の滓が 8 割方を占める。含鉄部は上半部主体。	△ 5.0	△ 3.8	△ 3.0	△ 64.0	6	錆化 (△)
6	F7	60	D6 II層	鍛冶滓 (含鉄)	扁平な鍛冶滓片。平面は酸化土砂に覆われており、一見、鉄製品破片を窺わせる。下面はわずかに椀形で側部に錆化の進んだ滓部がのぞく。下手側の磁着が強い。	△ 3.7	△ 2.0	△ 1.2	△ 10.2	6	錆化 (△)

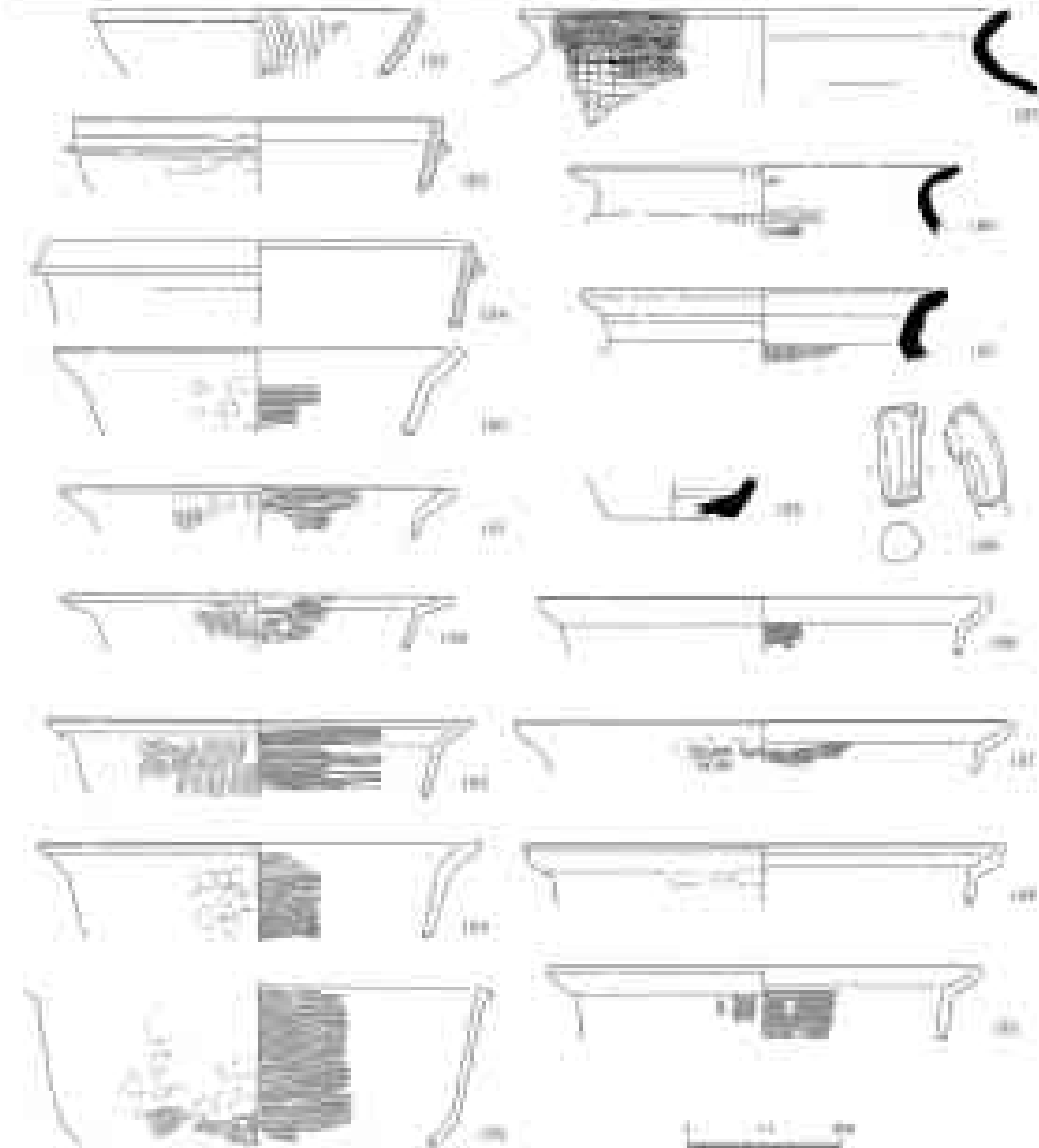


図 59 遺構外出土遺物 (2)

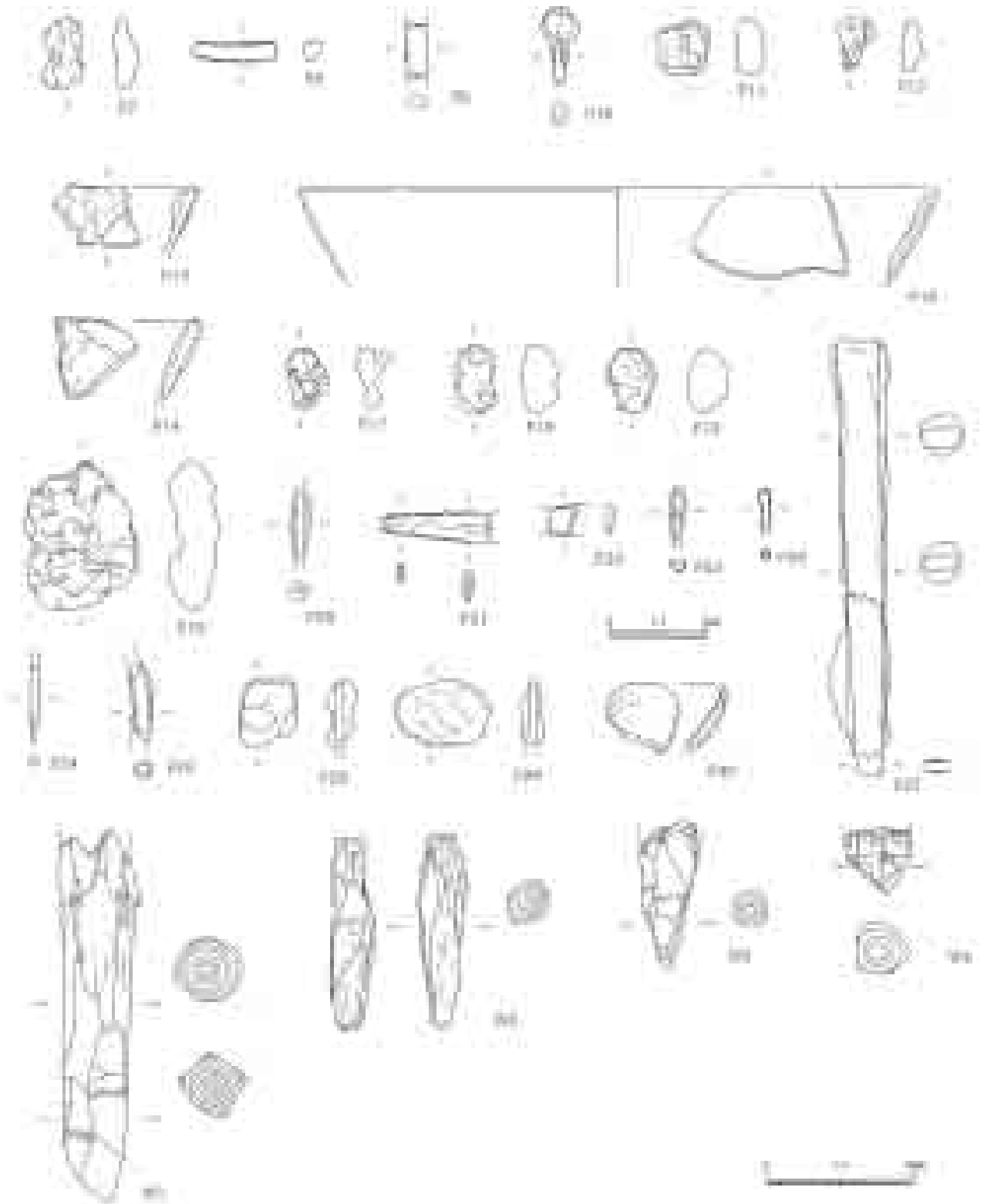


図 60 遺構外出土遺物（3）

遺物種別				遺物構成			
遺物種別	遺物構成	遺物種別	遺物構成	遺物種別	遺物構成	遺物種別	遺物構成
鉄製遺物	鉄製遺物	鉄製遺物	鉄製遺物	鉄製遺物	鉄製遺物	鉄製遺物	鉄製遺物
鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器
鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具
鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具
鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣
鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他
鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器	鉄製武器
鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具	鉄製農具
鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具	鉄製生活用具
鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣	鉄製貨幣
鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他	鉄製その他

図61 鉄関連遺物構成図(1)

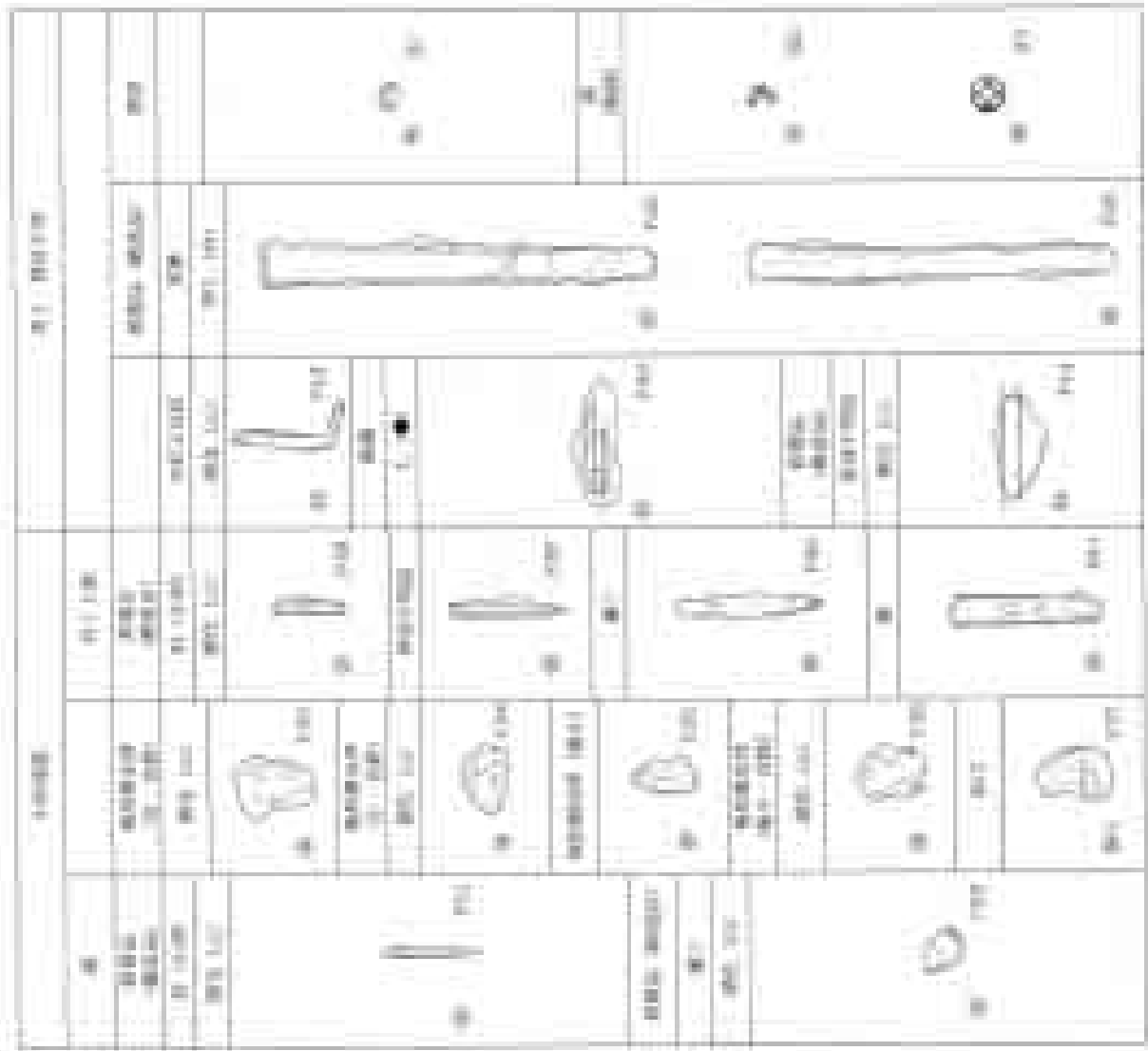


図 62 鉄関連遺物構成図 (2)

表 11 鉄関連遺物、銅製品観察表

※：復元、△残存値

構成 No.	遺物 No.	図 No.	地区 層位・遺構	遺物名	特徴	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度
7	F8	60	F3 III層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	短軸方向の断面形が不整三角形となる棒状の鉄製品破片。左右の側部が破面となる。平面的には刀子状となるが、背側が8mm近い幅をもち未製品の可能性あり。身部には鉄部が残る。	△ 4.2	1.0	1.0	19.2	3	M (◎)
8	F9	60	F3 III層	鉄製品 (鍛造品) ヘラ状不明品	幅 1.1cm ほどの扁平なヘラ状の鉄製品破片。側部は平坦で短軸側の両側部は破面となる。短軸方向にやや反り返り気味。	△ 2.8	1.2	0.5	△ 3.7	3	錆化 (△)
9	F10	60	G4 III層	鉄製品 (鍛造品) 楔状不明品	上手側が瘤状に広がった鉄製品。下手側には方形気味の断面形をもつ足部が突出する。製品名は確定できず、楔状不明品としておく。	△ 4.0	2.0	1.1	△ 14.4	4	M (◎)
10	F11	60	E5 II層	腕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	極小の腕形鍛冶滓の中核部から側部破片。上下面と上手側の側部が生きている。上面は平坦気味で木炭痕を残す。下面は深い碗形で部分的に木炭痕が深く残る。含鉄部は上面より主体。	△ 2.9	△ 2.7	△ 1.5	△ 20.0	4	錆化 (△)
11	F12	60	D3 P666	鍛冶滓 (含鉄)	葉状の突出部をもつ含鉄の鍛冶滓の小破片。上面は不規則な波状で下面は皿状。中間部分に板状の錆膨れが発達する。	△ 2.7	△ 2.0	△ 1.2	△ 3.7	3	錆化 (△)
12	F6	56	土坑 57	鉄製品 (鍛造品) ヘラ状不明品	幅 1.7cm ほどの薄板状の鉄製品破片。上下面は平坦で短軸側の両側部は丸みをもつ。刃部は認められない。左右の両側部は破面。ヘラ状不明品としておく。	△ 4.7	2.1	0.9	△ 13.4	3	錆化 (△)
13	F13	60	A区 II層	鉄製品 (鍛造品) 鍋	鉄鍋の口縁部破片。側面三面が破面で上手側は平坦な口唇部となる。体部の厚みは4mm前後、口唇部側で5.5mmほどになる。体部は外傾が強い。表面には酸化土砂が厚く、放射割れもはしる。	△ 3.0	—	1.1	△ 19.4	3	錆化 (△)
14	F14	60	F3 II層	鉄製品 (鍛造品) 鍋	鉄鍋の体部破片。厚みは4.5mmほどを測る。外傾気味。上手側は一見口唇状に見えるが破面である。表面には薄皮状の酸化土砂があり、放射割れもはしる。	△ 4.4	△ 4.2	△ 1.0	△ 19.8	2	錆化 (△)
15	F15	60	F2 III層	鉄製品 (鍛造品) 鍋	口唇部が薄くなる形状をもつ鉄鍋破片。上手側は生きており、側部三面は破面。身厚が1.5mmと薄く、鍋の形態もやや新しい形状をもつ。表面に酸化土砂が張り付き、内面を中心に放射割れあり。	口径 ※ 32.7	—	器高 △ 4.6	△ 35.2	1	錆化 (△)
16	F16	60	H8 VIII層	腕形鍛冶滓 (小・含鉄)	二片に割れている小型の腕形鍛冶滓。左側の側部と上手側は破面となる。上面はやや平坦気味で中央部が工具痕様に窪む。下面は短軸方向にわずかに突出する碗形。滓質はガス質。含鉄部は全体に分散する。	△ 7.5	△ 5.9	△ 2.4	△ 124.0	6	錆化 (△)
17	F17	60	H7 VIII層	鍛冶滓	半流動状の鍛冶滓片。滓質は構成No.4によく似ており、平面の付着物も類似する。一回り大きな滓の肩部破片。表面には木炭痕が強い。構成No.4と出土位置が同じ杭ながら4層と5層という違いをもつ。	△ 3.2	△ 2.1	△ 1.8	△ 10.2	1	錆化 (△)
18	F18	60	H8 VIII層	鍛冶滓? (含鉄)	酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。上面は平坦気味で、下面は碗形となる。ただし全体に酸化土砂が厚く不明点も多い。	△ 3.5	△ 2.1	△ 1.8	△ 19.2	7	錆化 (△)

表 11 鉄関連遺物、銅製品観察表

△は残存値

調査区	遺物ID	年代	層位・遺構	遺物名	特徴	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	検出層	備考
19	F19	80	C3 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 33	△ 28	△ 20	△ 17.8	5	銅化(△)
20	F20	80	X Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 32	△ 10	1.1	(3.4)	1	銅化(△)
21	F21	80	J30 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 55	△ 18	△ 08	△ 25	3	銅化(△)
22	F22	80	F8 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 15	△ 14	△ 04	△ 10	1	銅化(△)
23	F23	80	F9 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 25	△ 08	△ 05	△ 20	2	銅化(△)
24	F24	80	J8 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 37	0.5	0.5	△ 18	2	銅化(△)
25	F25	80	X Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 40	1.1	0.8	△ 51	2	銅化(△)
26	F26	80	C3 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 21	0.7	0.8	△ 11	2	銅化(△)
27	F27	80	X Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 22.5	3.0	0.8	△ 250.0	8	特異(△)
28	F28	80	F7 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 35	△ 29	1.5	△ 18.2	3	銅化(△)
29	F29	80	J8 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 34	△ 40	1.1	△ 27.8	4	銅化(△)
30	F30	80	J8 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	高さ △ 33	△ 39	0.7	△ 18.4	3	銅化(△)
31	F31	80	溝? ⑧層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 52	0.5	0.5	△ 17	1	銅化(△)
32	F32	80	溝? ⑧層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 25	△ 24	0.9	△ 82	2	銅化(△)
33	F33	80	F7 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 40	△ 39	△ 31	△ 33.5	?	銅化(△)
34	F34	80	F10 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 28	△ 42	△ 21	△ 37.4	?	銅化(△)
35	F35	80	J30 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 40	△ 23	△ 18	△ 17.2	4	なし
36	F36	80	X Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 42	△ 34	△ 23	△ 44.2	4	銅化(△)
36L	F37	80	F8 Ⅷ層	羽口	羽口破片。外径は 15cm 前後を測る。	△ 48	△ 32	△ 33	△ 34.0	-	-
37	F38	80	F8 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 45	1.0	0.9	△ 81	2	銅化(△)
38	F39	80	J30 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 72	1.3	0.4	△ 11.8	1	銅化(△)
39	F40	80	C4 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 92	1.3	0.7	△ 15.2	3	銅化(△)
40	F41	80	J30 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 95	1.8	1.8		2	銅化(△)
41	F42	80	A区 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 84	1.0	0.4	△ 98	3	銅化(△)
42	F43	80	E8 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 28	△ 31	-	△ 68.5	5	1(●)
43	F44	80	溝?	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 68	△ 31	△ 17	△ 33.2	3	銅化(△)
44	F45	80	H7 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 24.7	3.0	2.0	△ 315.0	8	特異(△)
45	F46	80	C4 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	△ 29.0	2.5	2.0	250.0	8	特異(△)
46	21	80	J30 Ⅷ層	鉄製品 (銅製品)	直線とよく似た銅化土中に埋められた古銅片。やや丸みをもった形状で、下子製に由来するものと思われる。	-	-	-	0.7	-	1(○)
47	22	80	C3 Ⅷ層	元物(遺物)	元物(遺物)	-	-	-	0.8	1	なし
48	23	80	C3 Ⅷ層	元物(遺物)	元物(遺物)	-	-	-	2.3	1	特異(△)

第7章 中世前期の調査

No	グリップ	土色	長軸・短軸・深さ	底面	No	グリップ	土色	長軸・短軸・深さ	底面	No	グリップ	土色	長軸・短軸・深さ	底面			
560	D3	テスL(赤土)	52.0-43.5	25.0	47.2	640	J10	黄褐色	20.5-20.5	48.2	50.2	670	D3	II	34.0-33.0	15.3	47.9
568	C3	II	22.5-20.0	24.8	48.1	644	H9	黄褐色	24.0-23.0	10.8	49.0	672	D3	II	18.0-15.0	16.3	47.9
569	C3	II	30.0-18.0	14.3	48.3	646	H9	黄褐色	22.5-18.0	21.9	49.1	673	D3	II	-	-	-
570	C3	II	21.0-19.0	16.8	48.3	646	J9	黄褐色	28.0-20.0	39.6	50.0	674	D3	II	23.0-20.0	31.2	48.1
571	C3	II	20.5-18.0	23.1	48.2	647	J9	黄褐色	25.0-20.5	32.6	50.1	675	D3	II	27.0-18.5	18.5	48.1
572	C3	II	25.5-24.5	10.2	48.4	648	H9	黄褐色	22.0-20.0	28.0	49.0	677	D3	II	29.0-20.0	20.2	48.1
575	D4	III	37.0-30.0	50.8	48.0	649	J9	黄褐色	42.5-29.5	54.4	50.0	678	D3	II	26.0-24.0	20.4	48.2
577	D3	III	(55.0)(38.0)	57.7	47.6	660	J9	黄褐色	28.5-25.0	43.1	50.1	679	D3	II	24.5-24.0	22.0	48.1
578	D3	III	25.0(20.0)	37.6	47.7	663	G9	黄褐色	32.5-29.5	15.9	49.0	680	D3	II	24.5-19.5	21.0	48.1
583	D3	III	23.0-18.0	21.4	47.6	664	H7	黄褐色	-	-	-	697	D3	II	24.0-23.0	12.9	47.9
584	G9	黄褐色	-	-	-	660	J9	黄褐色	23.0-22.0	32.9	49.9	698	D3	II	30.0-22.5	13.0	48.0
588	G9	黄褐色	-	-	-	668	C3	II	34.0-19.5	30.0	48.1	699	D3	II	23.0-21.5	7.3	48.0
589	D3	IV	26.0-22.0	58.9	47.0	669	D3	II	33.0(23.0)	30.9	47.9						

表 13 中世前期土器・陶磁器観察表

※・後示量 △法存数 ()は底径

No	図 No	遺物 種別	形状	法存数 (n)		特徴	土 地 成	色 調	法存 率	備考
				口径	高さ					
143	56	テスL3	土師 鉢	-	△ 67	器内に突起が認められるもの。全体的に磨滅しており調整不明。	赤褐色	1/4		
144	56	テスL1	土師 鉢	※ 53	1.9	左右から内側へ凸するように成形。器縁は厚みをなし、高く盛り上がる。内面に凹線ナツ溝。器縁凹線外切りで今や器底を呈す。	赤褐色	底径 亮	底径 6.2cm	
145	56	テスL1・2	土師 鉢	-	△ 50	外周縁に口印あり。内面はカキム。上部に器底内側のものでみられるため、器縁近くのものと思われる。器内底面。	赤褐色			
146	56	土灰 42	土師 鉢	-	△ 49	外周縁に口印あり。内面も上部も赤褐色の器底あり。器縁以下凹線。外周縁は厚みをなし。内面ナツ溝。器縁は凹線ナツ溝あり。器底面。	赤褐色	1/4		
147	56	土灰 42	土師 鉢	※ 14.8	△ 34	二重口縁の器。口縁部は外方に突起するように肥厚する。内周縁ナツ溝。	赤褐色	I (
148	56	土灰 43	土師 鉢	-	△ 29	器縁は「V」字状に開く。器縁中位から上は欠損。内周縁に凹線ナツ溝あり。	赤褐色	II 2		
149	56	土灰 46	土師 鉢	※ 26.4	△ 41	今や片削する口縁部で、器縁は内側から取り除くようにして三角形状に突起するもの。器縁から下がった位置に断面三角の突起が認められる。内周縁ナツ溝。	赤褐色	I (
150	58	C8	白彩 鉢	※ 13.6	△ 27	口縁部は厚みを呈するもの。器縁中位で今や器底する。白彩I型。	赤・灰白色			
151	58	C8	白彩 鉢	※ 17.6	△ 13	口縁部は厚みを呈し、上縁部が平坦になる。白彩V 4類あるいはI型。	赤・灰白色	1/8 以下		
152	58	F5	白彩 鉢	※ 15.0	△ 21	口縁部の玉縁は今や赤いもの。丸みをもつ。	赤・灰白色			
153	58	I38	白彩 鉢	※ 15.1	△ 21	口縁部の玉縁は下型型で、下縁部に凹線が明確にはしる。白彩II型。	赤・灰白色			
154	58	C9	白彩 鉢	※ 12.0	△ 20	口縁部は厚みを呈し、光線は赤い。外周縁に凹線ナツ溝。白彩V型。	赤・灰白色	1/8 以下		
155	58	J9	白彩 鉢	※ 8.4	△ 1.2	口縁部で器底して片削する。器縁は今や丸みをもつ。	赤・灰白色			
156	58	E3	黄彩 鉢	(※ 5.2)	△ 1.8	内面および外周縁部下位まで黄彩。高台から高台までは赤褐色。高台は赤褐色で、縁は赤い。器縁部は赤褐色に赤い。器底面。	赤・オリーブ 灰白色	I (
157	58	C2・5	白彩 鉢	(※ 4.9)	△ 23	内面および外周縁部下位まで黄彩。高台から高台までは赤褐色。内周縁部から器底は器底して、縁は赤い。高台は赤褐色で、縁は赤い。器縁部は赤褐色に赤い。白彩II型。口縁部は厚みを呈し、器縁は赤い。器底と器縁部は器底。器縁は赤い。外周縁部は赤褐色に赤い。器縁部は赤褐色に赤い。器底面。	赤・灰白色			
158	58	J9	黄彩 鉢	※ 10.2	△ 1.6	口縁部は厚みを呈し、器縁は赤い。器底と器縁部は器底。器縁は赤い。外周縁部は赤褐色に赤い。器縁部は赤褐色に赤い。器底面。	赤・オリーブ 灰白色			
159	58	E5	白彩 鉢	-	△ 13	内周縁に口印あり。外周縁には並行する細い凹線。白彩V型。	赤・灰白色	1/8		
160	58	I39	黄彩 鉢	-	△ 13	内周縁に口印あり。外周縁には並行する細い凹線。白彩V型。	赤・黄褐色	1/8		
161	58	C8	白彩 鉢	-	△ 67	外周縁に凹線ナツ溝あり。器底は内周縁も今や赤い。口縁は片削するものである。	赤・灰白色			
162	58	F5	白彩 鉢	※ 8.2	△ 4.8	口縁部は厚みを呈し、器縁はV字状になる。器縁は1段の段。器縁は赤い。ハケム状。	赤・黄褐色	1/8		
163	58	I37	土師 鉢	※ 13.5	△ 31	器縁の器。口縁は厚みを呈する。器縁は今や赤い。器底面。	赤褐色	1/7		
164	58	A区 灰	土師 鉢	※ 8.4	△ 1.8	磨滅しており調整は不明瞭ながら、手づくねのものと思われる。器縁は厚みを呈し、口縁部は赤い。	赤褐色	1/4		
165	58	E2	土師 鉢	※ 9.0	1.7	丸みをもつる器底で、器底は赤い。内周縁ナツ溝。器縁は凹線ナツ溝あり。器底面。	赤褐色	1/5	底径 * 5.2	
166	58	E2	土師 鉢	※ 7.2	1.7	口縁は今や内周縁のもの。器縁は今や赤い。器底面。	赤褐色	1/4	底径 * 5.5	
167	58	J10	土師 鉢	※ 7.2	1.6	口縁部は厚みを呈し、器縁は丸みをもつ。器底面。	赤褐色	1/8	底径 * 5.5	
168	58	E2	土師 鉢	※ 8.6	1.9	口縁部は厚みを呈し、器縁は丸みをもつ。全体的に磨滅。器底面。	赤褐色	1/4	底径 * 7.1	
169	58	灰	土師 鉢	※ 8.8	1.4	口縁は今や内周縁のもの。器縁は今や赤い。器底面。	赤褐色	1/5	底径 * 7.1	
170	58	E2	土師 鉢	※ 8.5	1.5	器縁中位で片削する器底。器底は赤い。内周縁ナツ溝。器底面。	赤褐色	1/5	底径 * 6.4	
171	58	赤土中	土師 鉢	※ 6.4	1.8	口縁は厚みを呈し、器縁は外側に突起し、器底は赤い。内周縁ナツ溝。器底面。	赤褐色	1/4	底径 * 4.2	
172	58	C7	土師 鉢	※ 7.4	1.6	口縁は厚みを呈し、器縁は外側に突起し、器底は赤い。内周縁ナツ溝。器底面。	赤褐色	1/4	底径 * 6.0	

173	S8	C7 I層	土師 器Ⅲ	※ 7.8	1.6	底部からやや上がってから口縁へ外反。胴部はやや尖り 気味。底部回転分有り。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡褐色	底径 1/4	底径×5.8
174	S8	F7 I層	土師 器Ⅲ	※ 8.0	1.6	底部からやや上がってから口縁へ外反。胴部は細腰状の、 胴部はやや尖り気味。底部回転分有り。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	暗褐色	底径 1/4	底径×6.0
175	S8	H7 I層	土師 器Ⅲ	※ 8.8	△ 1.5	口縁は外反し、胴部の膨脹をもち、内側ナブ。底部回転 分有り。外側に陥凹状の痕跡あり。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄褐色	口径 1/5	底径×6.6
176	S8	J9 I層	土師 器Ⅲ	(※ 7.0)	△ 5.8	胴部中央でわずかに屈曲するもの。膨脹率の、内側ナブ あり。底部回転分有り。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	暗灰色		
177	S8	E2 I層	土師 器Ⅲ	(7.4)	△ 1.9	底部からやや高直に立ち上がる。内側ナブ。底部 外側に粘土状の痕跡あり。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡灰色	底径 5/4	
178	S8	H8 I層	土師 器Ⅲ	(※ 5.6)	△ 1.6	底部から外反気味に立ち上がる。底部回転分有り。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄褐色	底径 1/5	
179	S8	E2 II層	土師 器Ⅲ	※ 8.0	1.7	底部からやや高直に立ち上がる。胴部にはナブの痕跡が 認められる。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡灰色	底径 残存	底径×4.5 底径×5.0
180	S8	E2 I層	土師 器Ⅲ	8.5	1.2	ややいびつなものの、底部からやや高直に立ち上がる。全 体的に2次焼成により赤味。底部回転分有り。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄褐色	口径 残存	底径×5.0 底径×6.0
181	S8	E2 I層	土師 器Ⅲ	※ 10.0	1.9	底部からやや高直に立ち上がる。口縁部はわずかに外反。 胴部にはナブの痕跡が認められる。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	暗灰色	底径 1/2	底径×5.8 底径×6.8
182	S9	E5 II層	灰土 器Ⅲ	※ 20.8	△ 4.1	全体的に厚板。口縁部は肥厚し下唇部が下墜する。内 側にスリム。外側に頸部は細い。外側に外反。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡灰色		
183	S9	A区下段 東科Ⅲ	灰土 器Ⅲ	※ 24.0	△ 4.8	やや外反する口縁で、胴部下には内側ナブから強くナブら れ、口縁部に陥凹。その下にやや上内側の交差。交差下 には頸部圧痕。内側ナブあり。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	灰色	I (
184	S9	J9 I層	土師 器Ⅲ	※ 27.4	△ 5.5	口縁部は内側から直取りられ、三角形状に尖る。胴部 より下でやや高直に折角の交差が付く。外側から口 縁内側まで膨脹。内側ナブ。外側はナブあり。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄灰色		
185	S9	D5 I層	土師 器Ⅲ	※ 31.6	△ 5.5	口縁部は内側から直取りられ、三角形状に尖る。胴部 より下でやや高直に折角の交差が付く。外側から口 縁内側まで膨脹。内側ナブ。外側はナブあり。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	灰色	I (底径×5.8
186	S9	A区下段 東科Ⅲ	土師 器Ⅲ	※ 25.0	△ 4.8	口縁部は内側から直取りられ、三角形状に尖る。胴部 より下でやや高直に折角の交差が付く。外側から口 縁内側まで膨脹。内側ナブ。外側はナブあり。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	灰色	I (
187	S9	F4 II層	土師 器Ⅲ	※ 25.4	△ 4.4	口縁部は内側から直取りられ、三角形状に尖る。胴部 より下でやや高直に折角の交差が付く。外側から口 縁内側まで膨脹。内側ナブ。外側はナブあり。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	灰色	I (
188	S9	H8 I層	土師 器Ⅲ	(※ 8.2)	△ 2.8	厚み出しの高直なもので、高直な部分に凹み。内 側の一部には黄褐色の膨脹状のものがある。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄灰色	I (
189	S9	H8 I層	土師 器Ⅲ		△ 6.7	胴部は細かく直取り状に膨脹する。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡褐色		最大幅 5.1
190	S9	F7 I層	土師 器Ⅲ	※ 26.0	△ 5.7	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はやや尖り、口縁部は ナブ。胴部には頸部圧痕。内側は直取りのハケム。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄褐色	口径 1/8以下	
191	S9	H9 I層	土師 器Ⅲ	※ 25.0	△ 5.2	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡褐色	I (
192	S9	E2 I層	土師 器Ⅲ	※ 24.8	△ 5.5	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄褐色	I (
193	S9	E5 II層	土師 器Ⅲ	※ 27.6	△ 5.0	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄褐色	I (底径×5.7
194	S9	E5 I層	土師 器Ⅲ	※ 28.0	△ 6.2	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡褐色	口径 1/8以下	
195	S9	E2 II層	土師 器Ⅲ		△ 10.6	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡褐色	II (底径×5.8
196	S9	F2 F408	土師 器Ⅲ	※ 29.0	△ 5.8	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡褐色	口径 1/20	
197	S9	D5 II層	土師 器Ⅲ	※ 32.0	△ 5.4	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄褐色	I (
198	S9	E5 I層	土師 器Ⅲ	※ 27.6	△ 4.7	胴部からやや高直に立ち上がる口縁部はナブ。口縁部は 内側は直取りのハケム。胴部以下は頸部圧痕。胴部には頸部 圧痕。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡褐色	口径 1/8以下	
199	S9	J10 I層	灰土 器Ⅲ	※ 30.0	△ 4.1	口縁部は1字に直取りし身付口縁になるもの。内側から口縁 部までナブ。胴部以下は頸部圧痕。口縁部は直取り。 外側は直取り。	◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆	淡黄灰色	I (

表 14 中世前期石製品観察表

No.	遺構・層位	図 No.	種別	法量 (cm), g (kg)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重量		
S13	テラス 3	56		31.5	△ 17.3	6.5	436kg	角閃石安山岩	窪り面あり、複製による劣化

表 15 中世前期木製品観察表

No.	遺構・層位	図 No.	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考
W1	D 回谷 Ⅲ層	60	杭	△ 25.7	5.2	4.5	-	
W2	H9 クリッド Ⅲ層	60	杭	△ 13.6	3.3	2.7	-	
W3	D 回谷 Ⅲ層	60	杭	△ 10.2	3.9	2.3	-	
W4	H9 クリッド Ⅲ層	60	杭	△ 4.5	4.7	3.7	-	

第8章 中世後期以降の調査

第1節 概要 (図63)

当該期の遺構は、表土及び耕作土であるI層の下面で検出した。遺構数は溝3条、土坑2基、ピット2基と少なく、その分布はA区北半に集中する。時期的にも、室町時代後期に属するものが大半である。これらの遺構は、城や館に関連する構築物の可能性があり、調査地東側に隣接する城跡（門前鎮守山城跡）との関連が注目される。遺物は、土器・陶磁器・鉄器などが出土している。遺構集中部で、室町時代後期の遺物が多く出土している。近世以降の遺物はA・B区とC・D区の谷付近に多く出土する傾向にある。 (湯川)

第2節 遺構と遺物

土坑47・溝6 (図64、図版40)

調査地北端、A2、B2・3グリッド、調査地東側に隣接する谷の傾斜変換点付近に位置する。I層直下で検出した。土坑47と溝6には、明確な切り合い関係はない。

土坑47は、隅丸方形の平面形態を呈し、長軸2.7m、短軸2.4mを測る。断面形態は逆台形で、検出面よりの最深は0.8m、底部の標高は47.7mを測る。中位に幅0.1～0.2mの段を有し、この段より下は御来屋礫層と推定される岩盤である。岩盤掘削部分には、工具痕が明瞭に残っていた。幅12～13cmの方形もしくはL字状で断面の片側が浅いもの、幅2～3cmで細長い紡錘状で断面がV字状を呈するものの2種類に大別できる。後者は、側面隅部に多く存在する。したがって、これらの工具痕は、幅12cmほどの刃部を有する鋤状の工具による掘削痕跡と判断した。埋土は、灰色系の土色を呈する。出土遺物は、③・④層からのみ少量出土している。200は青花皿で、16世紀前半に位置付け



図63 中世後期遺構分布

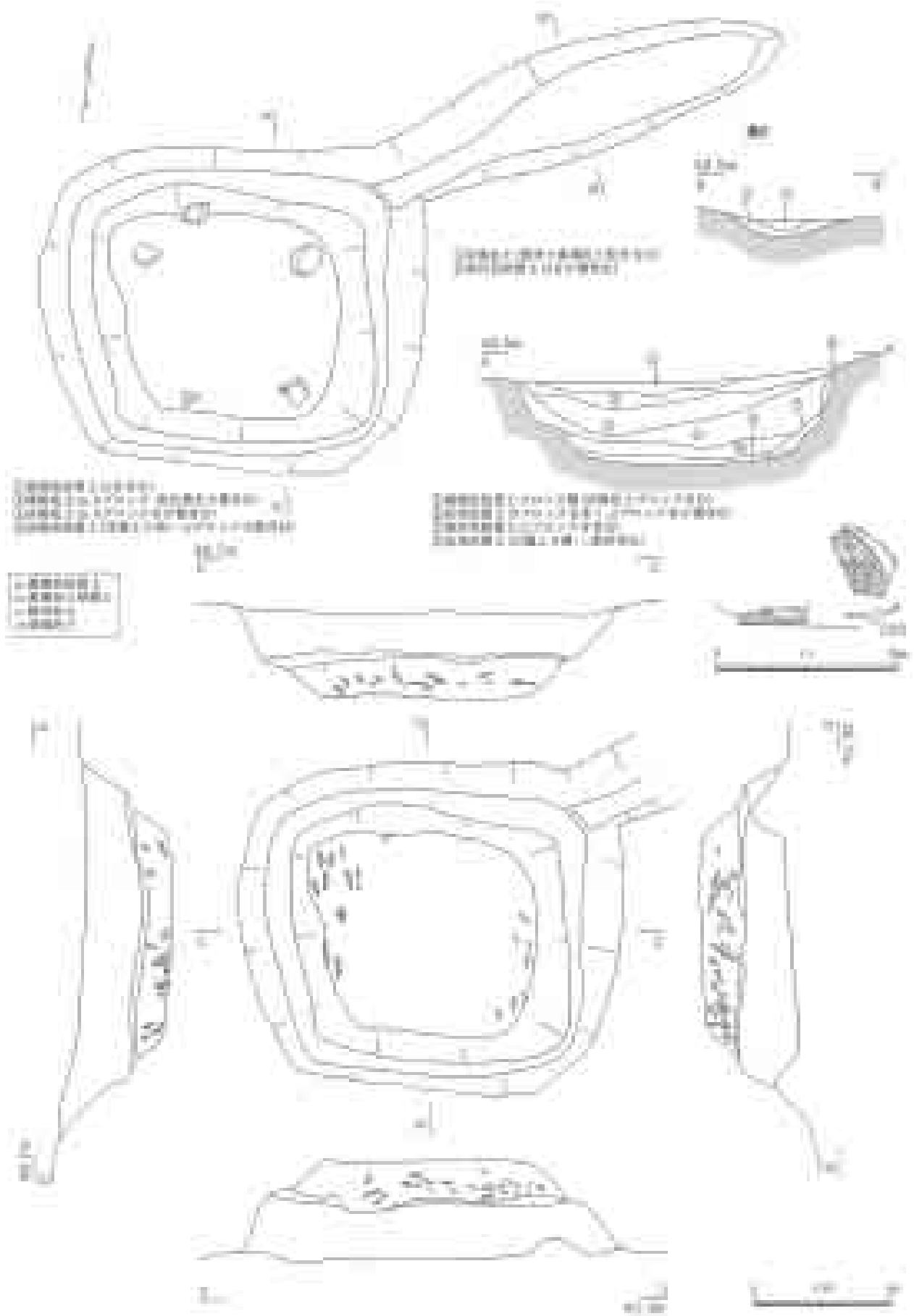


图 64 土坑 47、溝 6 および出土遺物

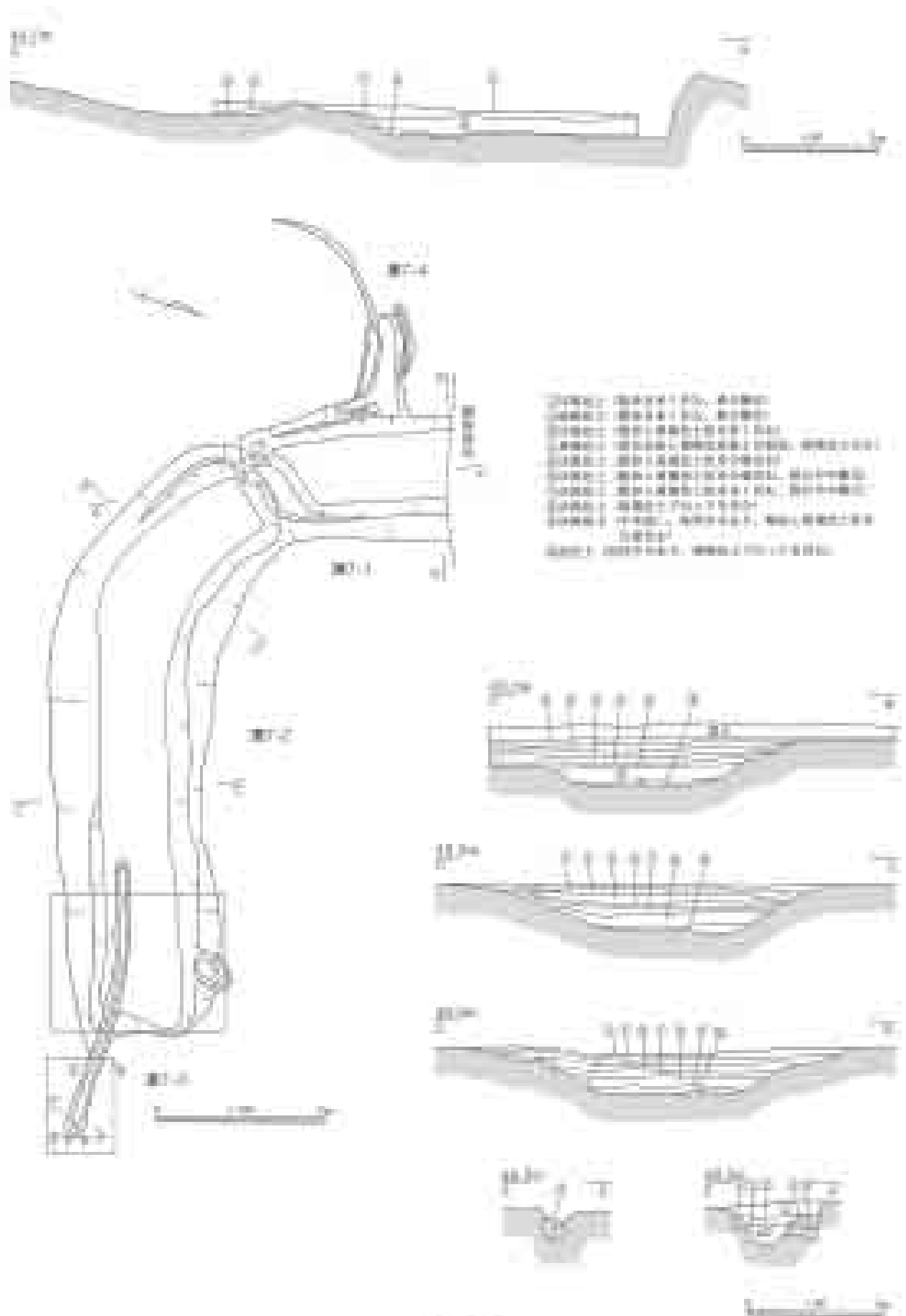


図65 溝7



この遺構は、土坑48の南側に位置し、長方形の平面を呈する。壁は土質で、厚さ約10cm程度と推定される。内部は比較的平坦で、底面には若干の凹凸が見られる。また、この遺構の周囲には、他の土坑や溝の痕跡も確認されている。



図66 溝7、土坑48および出土遺物

られる。出土遺物と土色から当該期の土坑と判断した。

溝6は、残存部の長軸約3.1 m、幅0.6～0.8 mを測る。断面形態は皿状で、北東が浅いが、底面の標高は北東が低い。遺物は、出土していない。土坑47の一番低い北東隅から調査地東に隣接する谷に向かい延びており、明確な切り合いもないことから、土坑47と一連の遺構である可能性が高い。土坑47との関係から、当該期と判断した。(湯川)

溝7 (図65・66、図版38・39)

調査地北東端、A区北半に位置し、I層直下で検出した。L字状の平面形態を呈し、北側は調査地外へ延びる。屈曲部には地山削り出しによる高まりがあり、これを境に北側を7-1、東側を7-2と呼称する。7-2東側から調査地東に隣接する谷に向かい延びる細い溝を7-3、7-1西側で一段低くなっている部分を7-4と呼称する。いずれも、埋土は灰褐色系である。

溝7-1は、幅約2.2 m、検出面からの深さは最深で0.7 m、底面の標高は北側が低く47.65～47.7 mを測る。断面形態は逆台形を呈し、中位から上は傾斜がゆるくなる。7-2との境界となる高まりは、北側と西側にいくつか段を有する。7-1底面と、高まり最高部との比高差は約0.5 mである。

溝7-2は、土坑48を切って構築される。A区平坦部の東端で収束し、西側は北に向かって屈曲し7-1に連続する。東西方向は約9.1 m、幅約2.2～2.8 mを測り、断面形態は7-1と共通する。検出面からの深さは最深で0.7 m、底面の標高は東が低く、47.9～47.85 mを測る。底面の標高は、7-1よりも約0.3 m高い。

溝7-3は、7-2東側底部から7-2南東隅を通り、調査地東端の斜面へ延びる。7-2と7-3は埋土を共有しており、7-2下端と7-3上端は並行するため、一連の溝として報告する。断面形態は箱型を呈し、幅0.2～0.25 m、深さは最深で0.5 mを測る。底面の標高は、47.1～47.8 mで東が低く、7-2底部部分では7-3底面の方が2～5 cm低い。したがって、溝7の排水溝と判断した。東半部の上層からは、径20～40cmの礫が大量に出土した。被熱したものや、磨り面を持つものもあったが、大半は自然礫であった。

溝7-4は、7-1西側に広がり、東西方向へと伸びると考えられる。北側は調査地外へと延びており、正確な規模・形態は不明である。溝7-1と埋土を共有することから、一連の溝として報告する。西にゆくにつれ浅くなり、7-1から約2.9 mで立ち上がり不明瞭となる。南東部には、溝状の落ち込みがあり、この部分で検出面からの深さは最深で0.3 m、底面の標高は47.95 mを測る。

掘削痕跡は、溝7-2東半の底面と側面下半および、7-3の大半で検出した。この部分は、御来屋

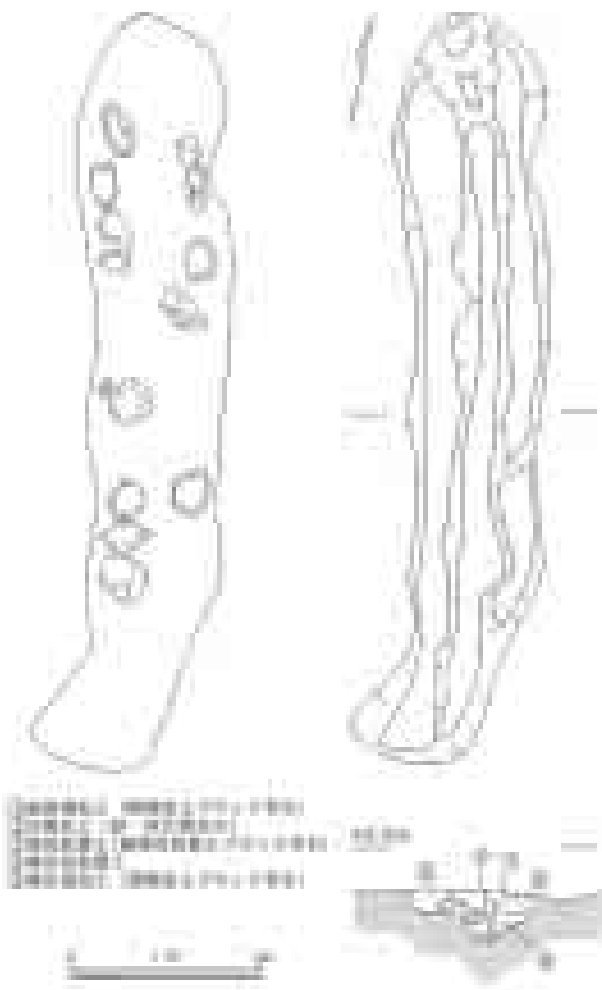


図67 溝8

礫層の存在する部分と重なることから、本来は他の部分にも掘削痕跡があったと想定されるが、検出はできなかった。前述の土坑47と同様、幅約12cmの刃部を有する工具が想定できる。大半が南北方向に長軸を持つことから、掘削作業の最終段階は主として、溝主軸と同方向を向いて作業が行われたと推定できる。

遺物は少量ながら、土器・陶磁器などが出土している。201～203は、土師器の皿である。204と205は青磁で、204の内面には劃花文が、205の外面には蓮弁文が施されている。

出土遺物と土色から、中世後半の遺構と判断した。規模が大きく、岩盤を掘削するなど構築労力が大きいことが想定できる。また、通路となりうる部分を残し、尾根先端部を区画することが想定できることから、城や館の堀として機能していた可能性がある。(湯川)

土坑48 (図66、図版38-2・3)

調査区東北端、B3グリッド、溝7-2北東部に位置する。溝7-2に南側を切られている。平面形態は長楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸8.5mを測る。断面形態は逆台形を呈し、北側に浅いテラス部を有する。底面の深さは約0.4m、標高は48.1mを測る。少量の遺物が出土しており、206は土師器皿、207は須恵器甕。出土遺物と溝7に切られていることから、当該期の遺構と判断した。(湯川)

溝8 (図67、図版40-2)

調査区東北端、B3グリッド、調査地平坦面の傾斜変換点に位置する。南北方向に伸びており、長

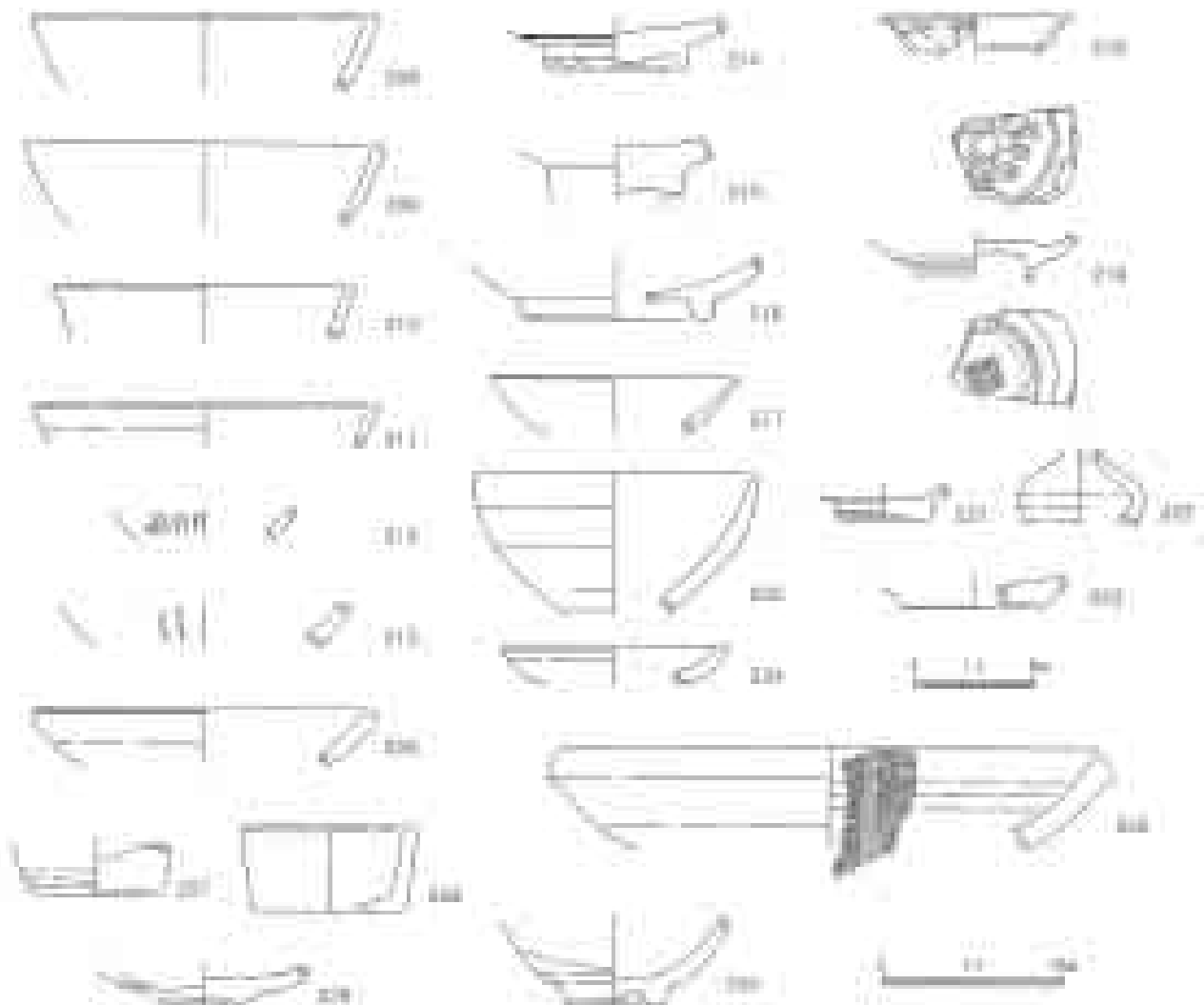


図68 遺構外出土遺物(1)



図 69 遺構外出土遺物 (2)

軸 3.9 m、幅 0.4 ~ 0.65 mを測る。断面形態は、両側にテラスを持つ逆凸字状を呈する。検出面からの深さは最深で約 0.3 m、底面の標高は 48.3 mを測る。両側のテラス部には、地山質の土 (④層) が入れられており、径 20cm 大の礫が多数出土した。これらは、中央の溝部 (②層) に構築物を入れる際の裏込めの可能性がある。遺物は出土していない。土色から当該期の遺構と判断した。(湯川) ピット 5・6 (図 63)

調査区東北端、B 3グリッド、調査地平坦面の傾斜変換点付近に位置する。規模を同じくするピットで、共に径約 0.5 m、深さ約 0.5 m、底面の標高は 47.7 mを測る。径 0.2 mの柱痕跡を有し、両ピット間の間隔は芯々で約 1.8 mである。東西方向に並んでおり、溝 7-2 東側、通路状の部分に正対していることから、入り口施設の可能性もある。遺物は出土していない。(湯川)

遺構外出土遺物 (図 68・69、カラー図版 8、図版 41)

本調査地における中世後期に属する遺物は少ない。貿易陶磁では青磁が主体を占めており、青花が若干あるものの、白磁が見られないことが特徴に挙げられよう。瀬戸美濃産のものも一定量みられる。一方、土師器皿は非常に少なく、その中で底部から直立的に立ち上がるもの (228) は、倉吉市山名

氏館跡推定地からも出土しているが、出土例は少ないものである。

鉄製品では、前節でも触れた馬跡がまとまって出土していることが注目されよう。(中森)

表 16 中世後期以降土器・陶磁器観察表

※・後示器 △法存確 ()法存疑

No	図 No	遺構 層位	種類	法量(%)		特徴	粘土 構成	色 調	法存 率	備考
				口径	高さ					
200	64	土坑 47	菊花皿	(※ 7.2)	△ 1.2	川野 B1 群皿。見込み花文。外口は唐草文。	粘土 良好	灰土・白色		
201	66	溝7 ①層上層	土師 群皿	※ 11.4	3.4	钵体でやや器用し立ち上がる口縁部をもつ。内口側ナブ。底平はへり切りの底ナブ。	やや粗 めめめ	灰褐色	II (底径※ 82
202	66	溝7	初群皿	※ 10.2	△ 1.9	口縁部は天の気度のもの。被熱しているためか、外口 の釉が不明瞭。内口灰褐色。唐草文。	古 良好	釉・灰褐色 灰土・灰色	口 径 1/8	
203	66	溝7	初群皿	※ 9.3	△ 1.6	全口に全周厚の釉。底平から器用気度し立ち上がる。 被熱痕跡あり。	古 良好	釉・灰色 灰土・灰色	II (
204	66	溝7 ②層	初群皿	-	△ 2.9	内口に唐草文。釉は重入多い。唐草文。	古 良好	釉・褐色 灰土・灰色	1/8 以 下	
205	66	溝7 ③層	初群皿	-	△ 2.9	外口に唐草文。釉は重入多い。唐草文。	古 良	釉・褐色 灰土・灰白色	1/8 以 下	
206	66	土坑 48	土師 群皿	※ 12.0	△ 1.7	口縁部で強いナブによりやや器用するもの。内口にも沿 く凹線状に盛り。钵体外口の縁部粗い。いわゆる京師系 土師群皿。	古 やや軟	灰褐色		
207	66	土坑 48	京師 群皿	-	△ 8.5	外口袖子口印。内口カキム。器用気度。	古 良好	灰色		
208	68	J8 I層	初群皿	※ 14.0	△ 3.2	上田E群。釉は重入多い。	古 良好	釉・淡オリーブ灰 色 灰土・灰白色	口 径 1/8 以下	
209	68	E5 I層	初群皿	※ 7.8	△ 3.8	上田E群。釉は重入多い。	古 良好	釉・オリーブ灰色 灰土・灰白色		
210	68	F10 I層	初群皿	※ 12.4	△ 2.3	上田D群。口縁部は天の気度。	古 良好	釉・褐色灰色 灰土・灰白色	口 径 1/8 以下	
211	68	土器層 上層	初群皿	※ 14.0	△ 1.7	上田D群。口縁部はたずかに外反。	古 良好	釉・オリーブ灰色 灰土・灰白色	口 径 1/8 以下	
212	68	D4 I層	初群皿	-	△ 1.8	上田B I群。釉は重入多い。	古 良好	釉・オリーブ灰色 灰土・灰色	I (
213	68	F4 I層	初群皿	-	△ 1.9	上田B II群。	古 良好	釉・淡オリーブ灰 色 灰土・灰白色	I 2	
214	68	E6 I層	初群皿	(※ 6.0)	△ 2.2	釉は高台外口までかかり。高台内面釉。钵体外口下に 平行凹線。	古 良好	釉・淡オリーブ灰 色 灰土・灰白色	I (
215	68	A 区 下段 I層 上層	初群皿	-	△ 2.4	高台部欠損。意匠的に打割られたいものか。高台裏は蛇 の口状の底。底平器用気度。	古 やや軟	釉・オリーブ灰色 灰土・灰色	I (
216	68	C9 I層	初群皿	(※ 7.7)	△ 2.6	方形の高台部縁部外口をカットする。底平器用気度。被 熱により詳細不明ながら、(56)に釉も類似。外口は蛇 口。	古 良好	釉・褐色灰色 灰土・暗灰色	底 径 1/8	
217	68	F4 I層	初群皿	※ 10.2	△ 2.4	底平から器用し。外口するもの。口縁部は天の気度。 被熱痕跡あり。	古 良好	釉・灰色 灰土・灰色	口 径 1/4	
218	68	X9 I層	菊花皿	※ 7.8	△ 1.5	口縁が外反する。外口に唐草文。全体に釉が施す。灰土 も少量。唐草文。	古 良好	灰土・灰白色	II (
219	68	C10I層	菊花皿	-	△ 1.9	川野E群。見込みに唐草。高台内に字跡。	古 良	灰土・白色	I 2	
220	68	C10I層	天日 奈群皿	※ 11.8	△ 5.8	口縁部は器用気度し立ち上がるもの。釉は钵体下直までかかり。 以下被熱。全体に被熱か。唐草文。	やや粗 めめめ	釉・褐色 灰土・灰白色		
221	68	F6 灰土	天日 奈群皿	(※ 30)	△ 1.5	器用気度なる高台。底平から立ち上がる钵体下直の器用 気度は多い。外口は底平は被熱によるものか異変状。唐草 文。	古 良	釉・褐色 灰土・灰白色	底 径 1/2	
222	68	E5 I層	初群皿	-	△ 3.2	川野の群。外口は薄く重褐色がかかり。唐草文。	古 良好	灰土・淡灰色		
223	68	C10I層	初群皿	(※ 6.0)	△ 1.5	外口も高台内口まで全周器用される。高台は広く丸み もつ。唐草文。	やや粗 めめめ	釉・褐色 灰土・灰白色		
224	68	C7・8 I層	初群皿	※ 9.2	△ 1.6	口縁部はたずかに器用。全体被熱し。釉がとれ。唐草 文。	やや粗 めめめ	釉・褐色 灰土・灰白色		
225	68	E5 I層	初群皿	※ 30.0	△ 5.7	やや器用する钵体で。口縁は三角形を生ず。底平は天の 内口にも全一厚のナブ。器用気度。	古 良好	褐色褐色	I (
226	68	F2	土師 群皿	※ 13.8	△ 2.3	内口から口縁外口までナブ。钵体外口は水筒型。口縁部 は凹線状で。やや凹線状に盛り。手づくね。	やや粗 めめめ	灰褐色	口 径 1/8	
227	68	F7 I層	土師 群皿	(5.2)	△ 2.2	非常に器用気度の器用気度高台のもの。底平は禁止外縁。	古 良好	灰褐色	I-4	
228	68	E2 I層	土師 群皿	※ 6.6	△ 3.6	底平から器用気度し立ち上がる。底平非常に器用気度。内 外口ナブ。京都市山名氏館跡推定地に類似。	やや粗 めめめ	灰白色	1/3	底径※ 63
229	68	E 区 最上 段 灰土	初群皿	(※ 3.8)	△ 1.8	外口下直まで器用。以下被熱。釉は薄いか重入多い。唐 草文。	古 良好	釉・褐色 灰土・褐色		
230	68	F2 I層	初群皿	(※ 4.0)	△ 3.7	外口下直まで器用。以下被熱。釉は薄いか重入多い。唐 草文。	古 良好	釉・オリーブ灰色 灰土・褐色		

第9章 時期不明の遺構と遺物

第1節 概要

時期不明のものは主にA・B区に分布する。それは古墳時代以降繰り返し削平を大きく受けており、包含層との直接的な関連が確認できなかったためである。なかにはいわゆる落とし穴状土坑とされるものも含むが、先述の理由から時期決定はできていない。(中森)

第2節 検出した遺構

土坑49(図71、図版42 5)

F4グリッド検出。上面で0.4m大の礫を検出。1.1×1.0mの不整な隅丸方形である。深さは1.5mを測る。底面に直径0.2m、深さ0.2mのビットを有す。埋土⑤層ほぼ上面に人廻大の平石、ビット上面に華大の礫を検出した。上層(①~④層)は比較的薄く互層状で、下層の⑤層が厚く堆積する。土坑50(図71、図版42 1・2)

E4グリッド検出。長径と短径が1.3×1.1mの不整な隅丸方形で、深さは1.0mおよび0.7mを測る。底面中央に同心円上に配された華~人廻大の十数個の礫が出土し、その下からビット状の産みを検出した。壁面付近に崩壊土と考えられる土(⑤層)があり、その間は0.2~0.4mの厚さで互層状に堆積する。

土坑51(図71、図版42 1・3)

E4グリッド検出。長径0.9m、短径0.8mの楕円形で深さは0.8mである。底面に直径0.1m、深さ0.1mのビットを有す。底面ビットを囲んで、華大から人廻大の数個の礫を検出した。

土坑52(図71、図版42 4)

D4グリッド検出。長径と短径が1.3×1.0mの不整な隅丸方形で、深さは0.7mを測る。底面に直径0.2m、深さ0.1mのビットを有す。底面ビットの上と、やや浮いた状態で華大の数個の礫を検出した。埋土はやや暗い褐色土が主である。

土坑53(図71、図版44 5)

G6グリッド検出。長径と短径が1.2×0.9mの隅丸長方形で、深さは残存値で0.1mを測り上層は削平され底面部を残すのみである。底部にビットを持ち、直径0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色土ブロックを含む黒褐色土である。

土坑54・55(図72、図版44 3・5)

G6グリッド検出。土坑54は土坑55を切る。長径1.2m、短径1.0mの楕円形を呈す。深さは0.8mを測る。暗褐色土系である。土坑55は長径と短径が0.9×0.5mの隅丸長方形で、深さは残存値で0.3mを測り上層は削平されている。底部にビットを持ち、直径0.1m、深さ0.1mを測る。埋土は暗~黄褐色土である。

土坑56(図72、図版43 2)

G5グリッド検出。長径0.8m、短径0.7mの楕円形で、深さは残存値で0.6mを測る。底面中央に直径0.2m、深さ0.2mのビットを有す。西側壁面はやや袋状に張り出す。埋土は黒褐色である。

土坑57(図72)

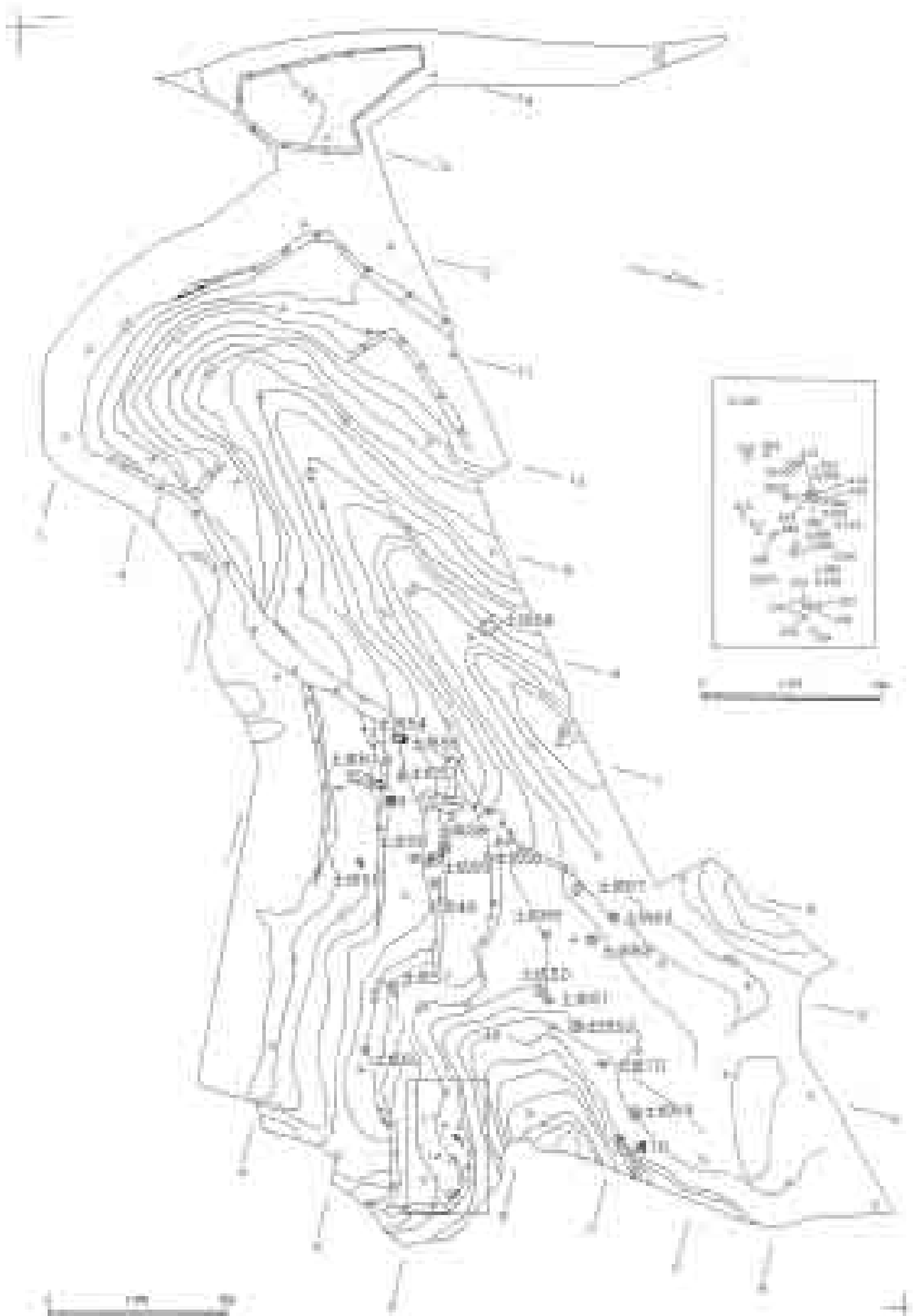


图 70 時期不明遺構分布

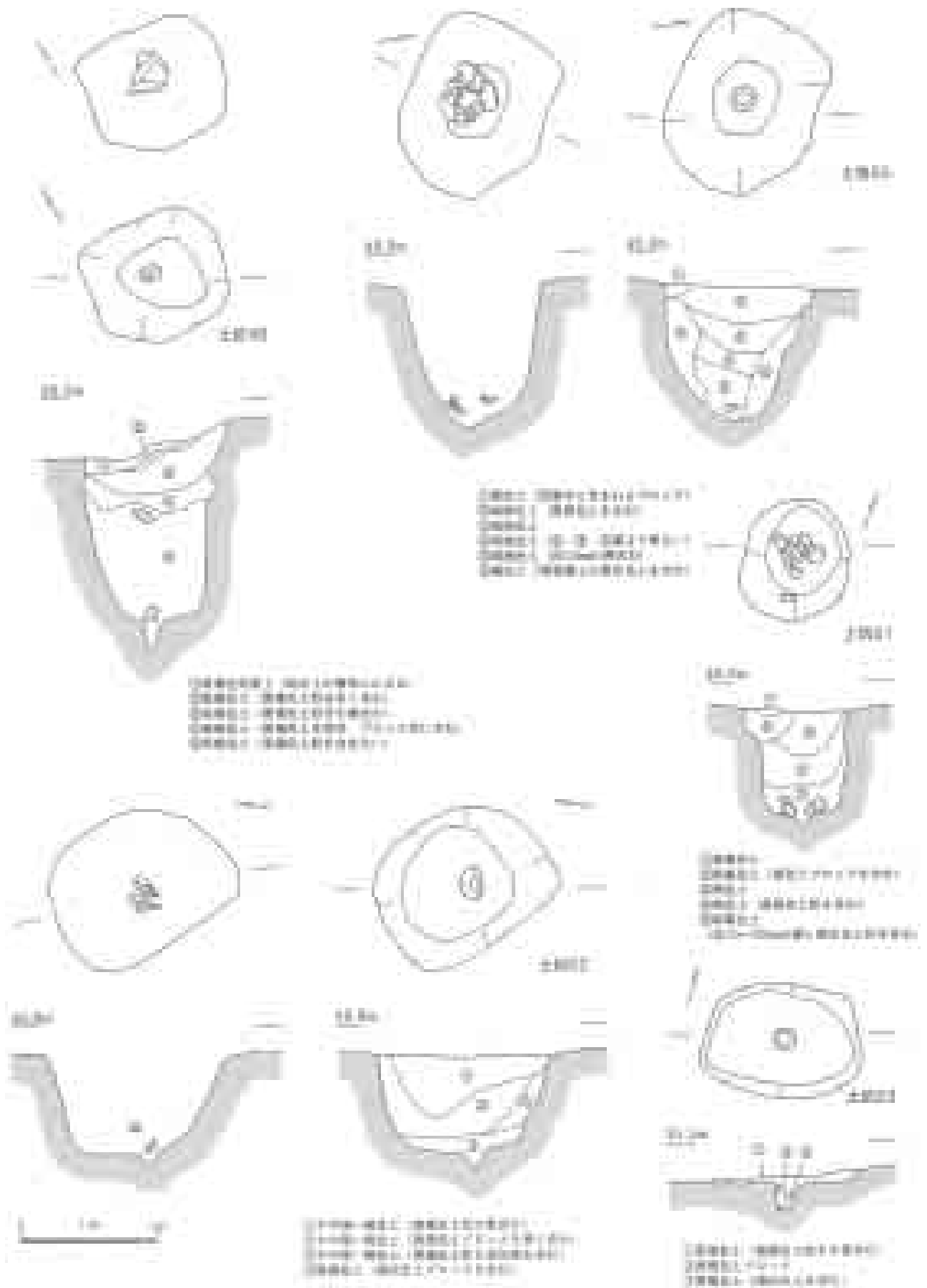


図 71 土坑 49 ~ 53

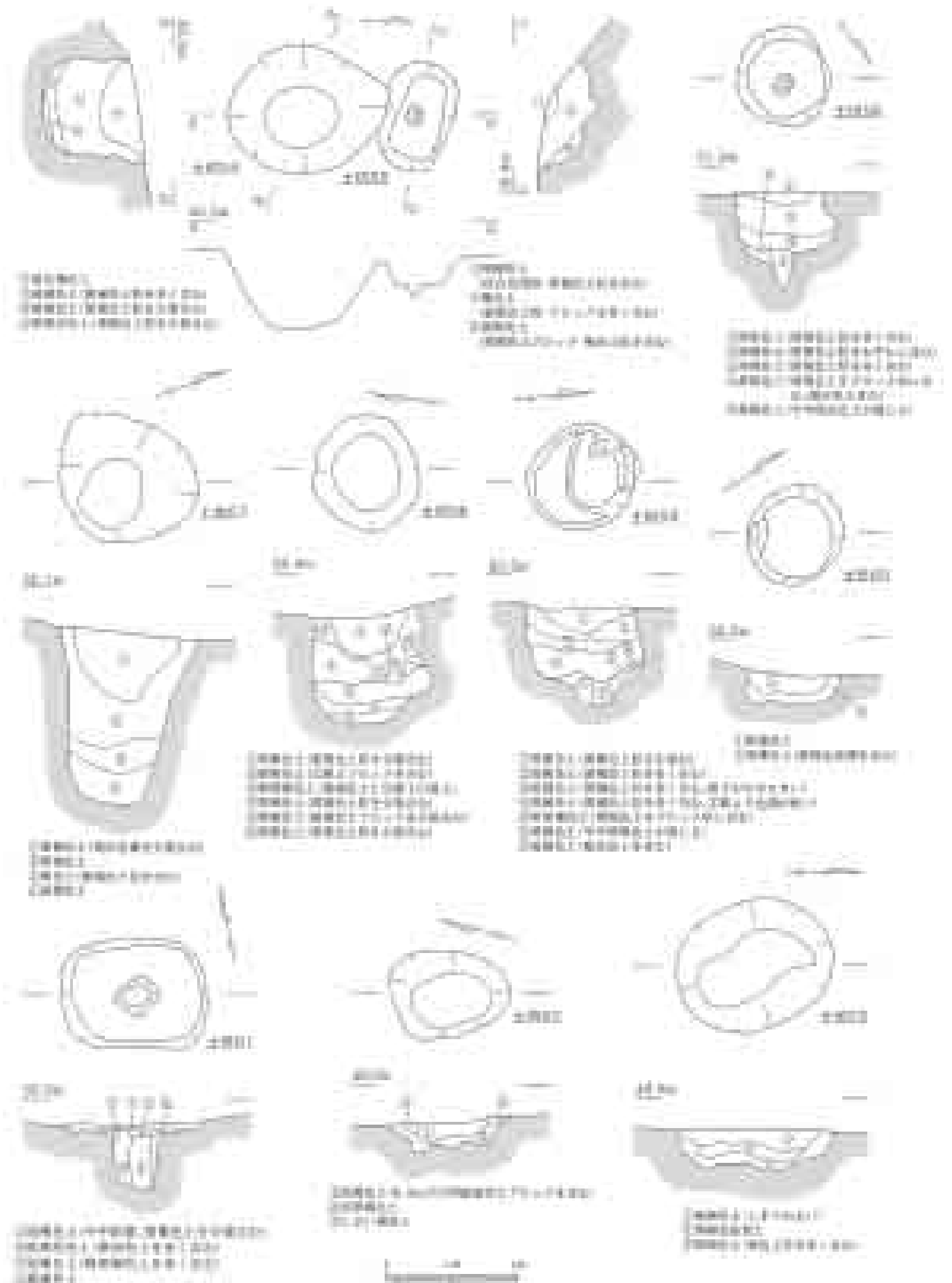


図 72 土坑 54 ~ 63

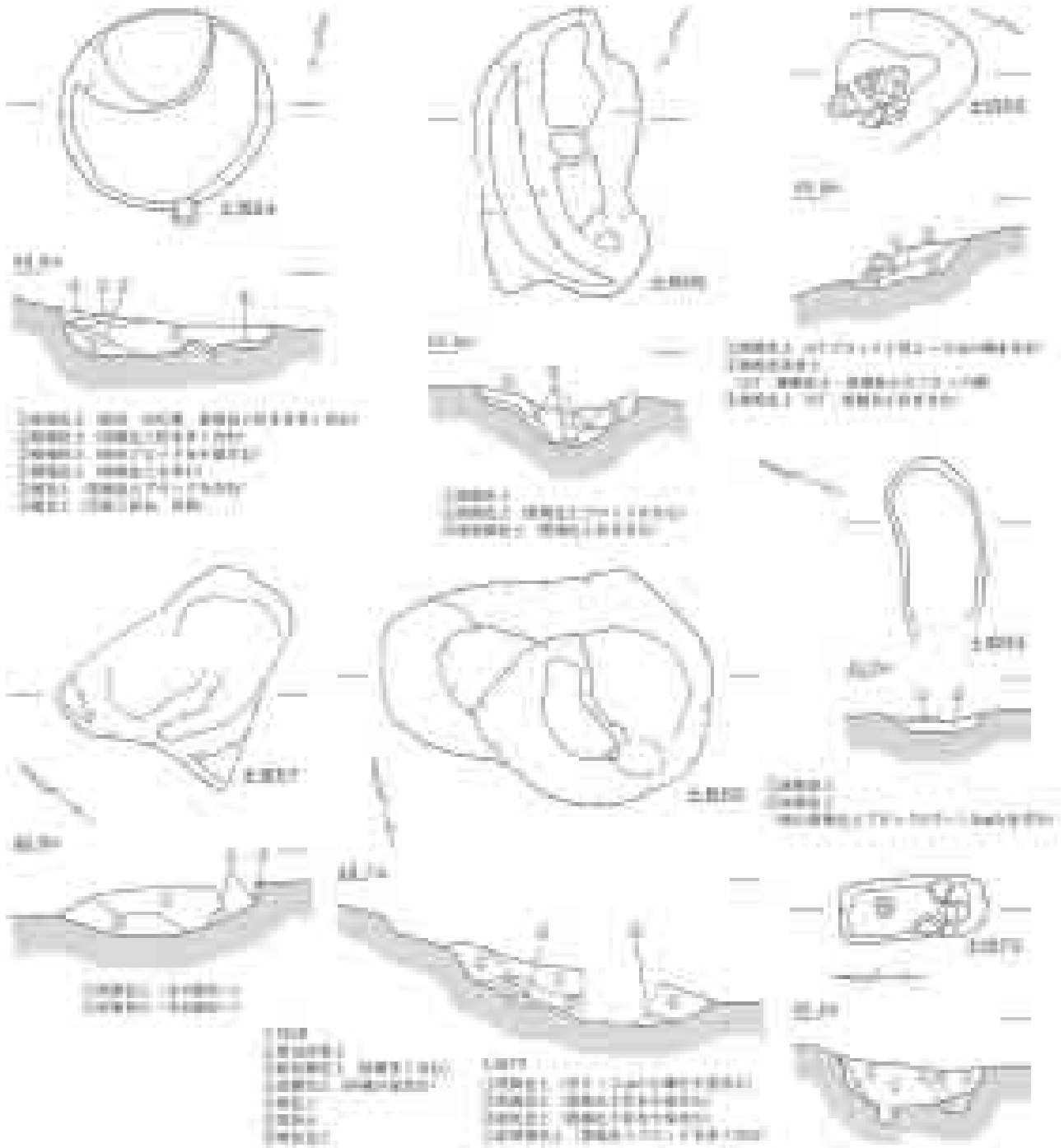


図 73 土坑 64 ~ 70

G 4 杭の北 1 m で検出。谷 2 の谷底に位置する。長径 1.1 m、短径 0.9 m の不整楕円形である。深さは 1.4 m を測る。下層埋土は褐色～黄褐色土、上層は黒褐色土である。

土坑 58 (図 72、図版 43 - 1)

F 4 グリッド検出。楕円形で長径と短径は 0.9 × 0.8 m、深さは残存値で 0.9 m を測る。黒褐色～暗褐色の埋土を主とし、上層には③層がブロック状に堆積する。

土坑 59 (図 72)

F 4 グリッド検出。楕円形で長径と短径は 0.9 × 0.8 m、深さは残存値で 0.8 m を測る。底面はテラス状に一段窪む。黒褐色～暗褐色の埋土を主とする。

土坑 60 (図 72)

G 3 杭の西 2 m に検出。直径 0.7 m のほぼ円形を呈し、深さは残存値で 0.3 m を測る。埋土は暗～黒褐色土である。

土坑 61 (図 72、図版 44 - 5)

G 6 グリッドに検出。1.1 × 0.9 m の隅丸方形を呈し、深さは残存値で 0.08 m である。底面中央に長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.4 m のピットを有する。土坑埋土は黒褐色土、ピットの埋土は壁面に黒褐色土、中心部が黄褐色土であり、柱痕であろう。

土坑 62 (図 72、図版 44 - 1)

D 5 グリッド検出。長径と短径が 0.9 × 0.7 m の不整楕円形を呈す。深さは残存値で 0.3 m を測る。底面は凹凸が激しい。上層では①層が②層を切ることから、別遺構の可能性がある。

土坑 63 (図 72、図版 44 - 2)

D 5 グリッド検出。長径と短径が 1.2 × 1.0 m の隅丸方形を呈す。深さは残存値で 0.3 m を測る。土坑 62 と近接し、埋土や形状から同時期のものと考えられる。

土坑 64 (図 73)

C 3 グリッド検出。直径 1.3 m の円形を呈す。深さは残存値で 0.3 m を測り、岩盤（御来屋礫層）まで掘り込む。埋土は暗褐色を主とする。

土坑 65 (図 73、図版 43 - 3)

F 5 グリッド検出。長径 1.9 m、短径 1.1 m の不整形である。深さは残存値で 0.4 m、断面はテラスを持つ U 字形を呈す。埋土は黒褐色を主とする。

土坑 66 (図 73)

F 5 グリッド検出。削平され平面形は一部が残存するのみで、長径は残存値で 1.0 m、短径 0.9 m である。埋土から A T ブロックと人頭大の礫を数個検出した。深さは残存値で 0.3 m である。埋土は褐色～橙色系で A T ブロックや黒褐色土ブロックを含む。

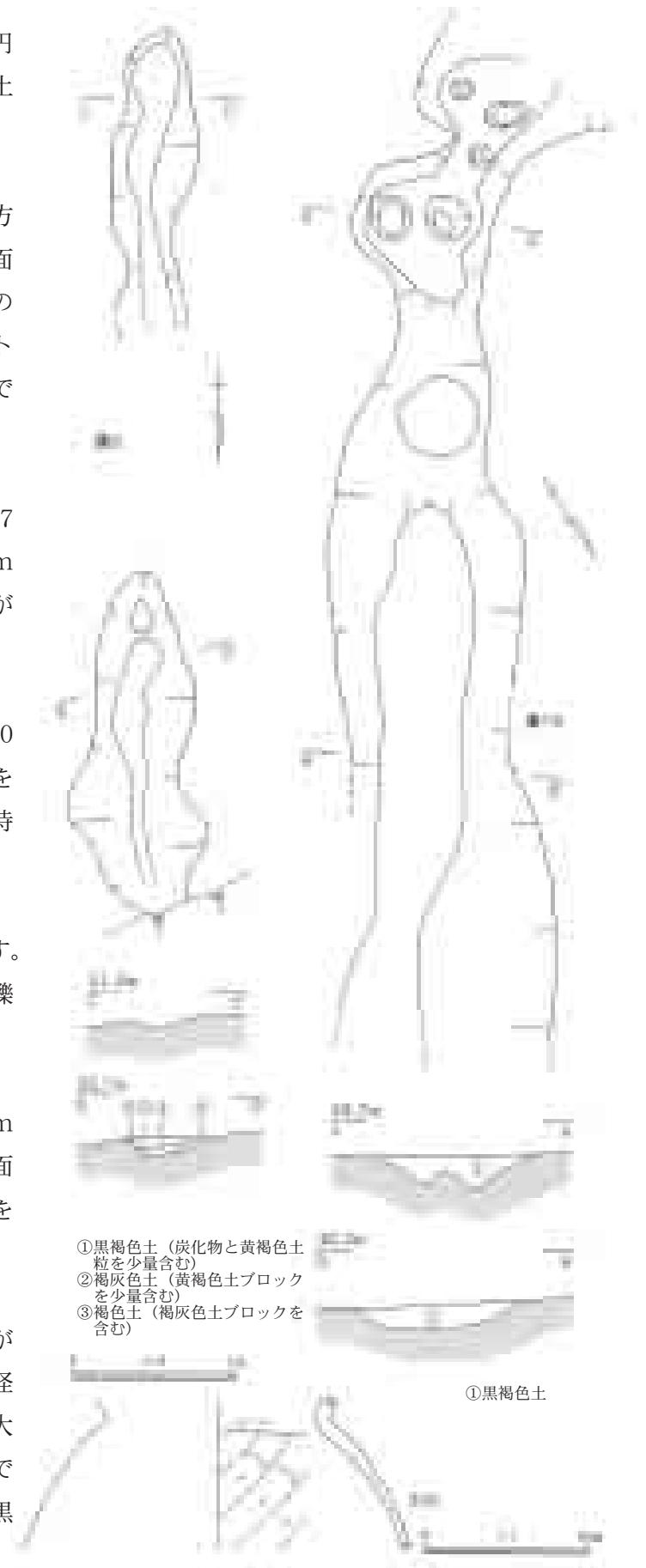
土坑 67 (図 73、図版 43 - 5)

図 74 溝 9・10

E 5グリッド、竪穴住居5溝Eに切られる。長径 1.5 m、短径 1.2 mの不定形をなす。深さは残存値で 0.3 mを測り、緩やかなテラスが2段ある。埋土は暗～灰褐色土できめが細かい。

土坑 68 (図 73)

F 8グリッド、D区谷部の北側斜面に位置する。長径 2.1 m、短径 1.5 mの不定形をなす。大きく2段の掘り込みをもち、深さは残存値で 0.5 mを測る。埋土は褐色～暗灰色から黒褐色で砂礫を含む。

土坑 69 (図 73、図版 44 - 4)

E 5グリッド検出。長径は残存値で 1.1 m、短径 0.5 mの長楕円形を呈す。深さは残存値で 0.1 mを測る。埋土は黒褐色土である。

土坑 70 (図 73、図版 43 - 6)

D 3グリッド検出。長径 0.9 m、短径 0.4 mの南北に長い隅丸方形を呈す。深さは残存値で 0.3 mを測る。埋土は黒褐色を主とする。

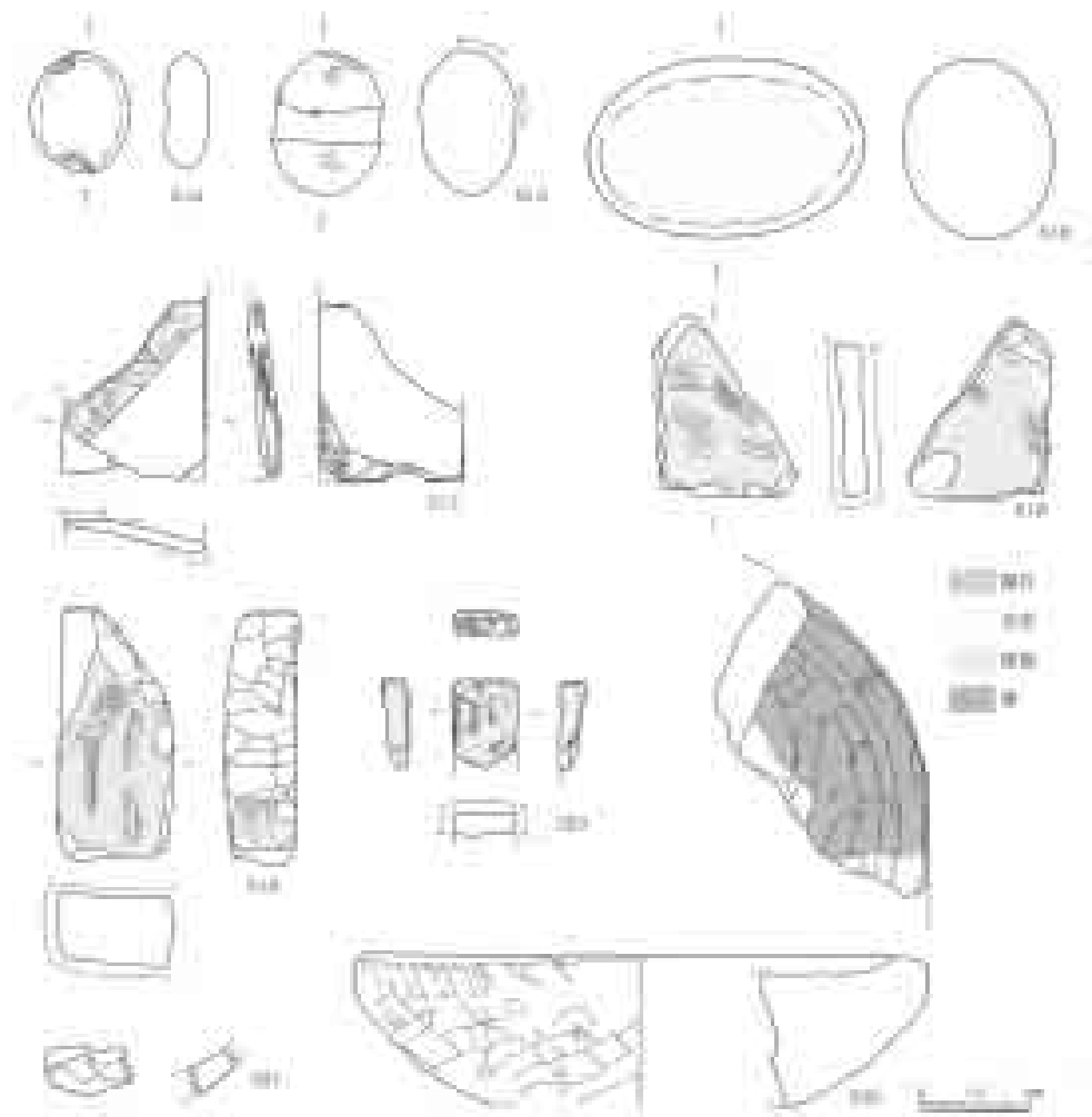


図 75 遺構外出土石製品

溝9、10 (図74)

溝9はF6、G6グリッド検出。削平され2つの部分に分かれているが、一連の溝だと考えられる。検出した長さ5.5m、幅0.8m、深さは0.1mを測る。埋土は褐色土系であるが、上層は炭化物を含み、黒みが強い。溝10はB3、C3グリッドで検出。谷2の開口部の北層部から本遺跡の載る台地周縁部に沿うように展開する。検出した長さ6.1m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は単層で黒褐色土である。土師器230が出土しているが、埋土との関係から遺構の時期を示すものではない。時期不明のピット

E2～3グリッドを中心に、谷2南斜面部上部の緩傾斜部分に分布する。多くが硬い御末層層を穿ったピットである。規模の小さいものが多く、特に配列は認められない。(浜田)

表17 時期不明遺構出土土器観察表

※・検出品 △法存品 ()は残存

No	図No	遺構・層位	種類	法量 (cm)		特徴	出土状況	色調	保存	備考
				口径	高さ					
230	74	C2 I層	土師器		△ 92	全体に磨耗 内面磨耗以下ケズリ。	細 々 な 破 片	淡褐色	(/)	

表18 時期不明石製品観察表

△法存品

No	遺構・層位	図No	種類	法量 (cm), g (kg)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重量		
S14	J9 溝側	75	打欠石焼	5.4	4.6	2.0	65.0	角閃石表山岩	
S15	H 8 溝側	75	有溝石焼	6.5	4.8	4.5	19.80	表山岩	使用痕(付状)あり 断面による溝あり
S16	E 2 層位不明	75	磨石	12.6	8.2	6.9	997.0	角閃石表山岩	表沢あり
S17	C 9 溝側	75	磨石	△ 8.1	6.6	0.7	39.0	法存品	断面縮減あり
S18	E 3 V層	75	磨石	△ 8.2	△ 6.3	△ 1.2	85.0	玄武岩	
S19	D 5 溝側	75	磨石	11.0	5.3	3.3	31.00	長石斑岩	
S20	H 7 溝側	75	磨石	5.1	2.9	1.2	20.0	長石斑岩	一寸幅断面縮減あり
S21	F 3 溝側	75	石鍋	法存品 △ 2.2	-	△ 1.3	19.0	滑石(御早産)	内外・工具痕
S22	溝2 谷側	75	石臼	△ 15.3	△ 7.8	△ 6.2	51.30	角閃石表山岩	内外・工具痕、表肌 上面に削り着

表19 時期不明ピット一覧

法量はcm、底面高(埋高)はm、()は残存品

No	グリッド	土色	長軸	短軸	深さ	底面	備考	No	グリッド	土色	長軸	短軸	深さ	底面	備考
254	E2	黄灰色	24.0	21.0	15.6	48.7	緑灰色粘土	391	E2	暗黄灰色	17.5	17.0	12.9	48.9	
255	E2	黄灰色	23.5	19.0	22.3	48.4	緑灰色粘土	392	E2	暗黄灰色	27.0	23.0	13.3	48.8	炭多量混
256	E2	黄灰色	16.0	13.0	22.3	48.8	緑灰色粘土	393	E2	暗黄灰色	24.5	23.0	17.1	48.9	
257	E2	黄灰色	25.5	21.5	19.9	48.9	緑灰色粘土	394	E2	暗黄灰色	20.0	17.0	22.4	48.9	
258	E2	暗灰色	22.0	21.0	12.3	49.0	緑灰色粘土								遺物No.1236 石15cm大・炭
259	E2	灰色	30.0	22.0	24.1	49.0	緑灰色粘土	408	E2	暗黄灰色					
260	E2	暗黄褐色	35.0	32.0	17.9	48.8		411	F2	黄灰色	17.0	13.0	6.0	49.2	
261	E2	暗黄褐色	30.0	27.5	17.1	48.7	遺物No.1065	412	E2	暗黄灰色	22.5	16.5	16.4	48.7	
262	F2	暗黄灰色	22.0	20.0	29.7	48.9		413	E2	暗黄灰色	(30.0)	(21.0)	18.9	48.7	
360	E2	暗黄灰色	25.0	19.0	28.7	48.5		414	E2	暗黄灰色	32.0	27.5	34.1	48.6	
361	E2	暗黄灰色	22.0	21.5	18.9	48.7		415	F2	暗黄灰色	21.5	13.0	12.1	49.1	
362	E2	暗黄灰色	50.0	32.5	25.9	48.6		416	E1	暗黄灰色					
363	E2	暗黄灰色	26.0	20.0	24.6	48.6		425	E1	暗黄灰色	19.0	17.0	7.2	49.1	
364	E2	暗黄灰色	22.0	20.0	8.0	48.8		454	E2	暗黄灰色	(19.0)	(10.0)	7.8	48.8	
365	E2	暗黄灰色	16.5	14.0	10.4	49.0		455	E2	暗黄灰色	(14.0)	16.0	22.5	48.7	
366	E2	暗黄灰色	20.0	20.0	14.6	48.8		456			37.0	26.0	35.1	48.5	
367	E2	暗黄灰色	26.5	23.0	36.4	48.7		667	D4.5	黒褐色					遺物No.1401
368	E2	暗黄灰色	20.0	19.0	11.9	49.0		671	D3	黒褐色					
369	E2	暗黄灰色	15.0	14.0	8.8	49.0		708	J9		45.0	39.0	29.8	49.1	
390	E2	暗黄灰色	17.0	16.0	11.9	48.9		710	H9		27.0	22.0	22.4	49.1	

第10章1 門前第2、門前上屋敷遺跡の地形の成り立ち

1. 本論の概要

本遺跡では縄文早期～中世の遺構や遺物を検出した。本遺跡は台地上および開析谷の河岸段丘上に位置する。開析谷および遺跡内にある埋積谷は、更新世末期に形成されはじめた。埋積谷の埋積過程で縄文早期に始まる遺跡が形成された。本遺跡は台地上という立地から堆積は緩やかであった。そのため、遺構面が比較的密に記録され興味深い知見を得ることができた。

2. 遺跡および周辺の地形

(1) 周辺地形 (図76・77)

本遺跡は大山北麓のなだらかな火山性の台地上にある。大山北麓の地形を概観すると、台地とこれを開析する小河川をつくる谷が、大山を中心として放射状に分布している。茶畑六反田遺跡の堆積を検討した岡田によると、開析谷は弥山熱帯(大山の最後の火砕流)流下時にはすでに形成されていたとされる(註1)。浜田は茶畑遺跡群の各遺跡の載る地質を検討し谷の形成はA T(始良丹沢火山灰)層の堆積前に遡ることを指摘した(註2)。今回の調査ではさらに古く、A T層の下位にあるローム層堆積時には、すでに谷が形成されていたことが明らかになった。



図76 遺跡および周辺地形 (南東から遺跡を望む)

(2) 遺跡の地形 (図77)

門前第2遺跡は台地上に立地する。門前上屋敷遺跡は名和川の開析谷の段丘上に位置する。上位の段丘は更新世末期の段丘で、下位には完新世段丘がある。門前第2遺跡内にはA・B区およびC・D区にそれぞれ1筋の埋積谷を検出した。埋積谷は褐色土および黒褐色土に充填されている。堆積過程はひじょうに緩やかである。

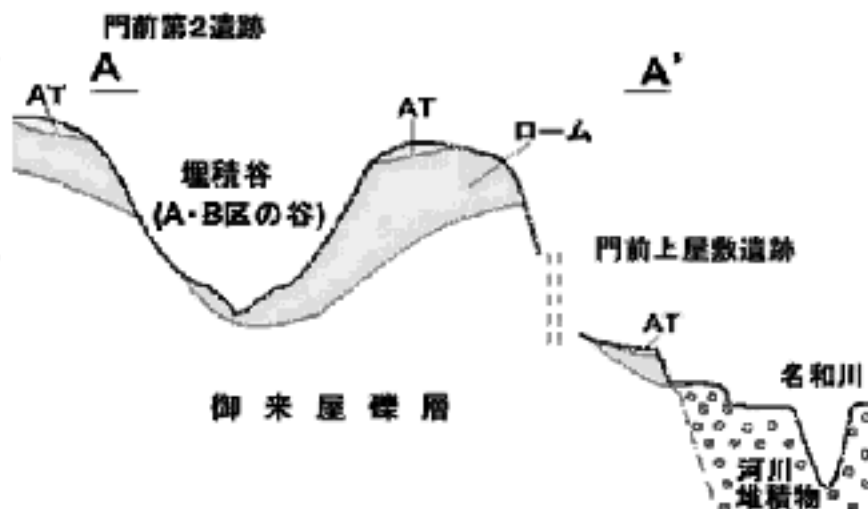


図77 断面概念図 (A-A' 断面)

3. 遺跡周辺地質と土層

(1) 地山の地質 (図78 参照)

基盤は下位より御来屋礫層、ローム層、AT層に分けられる。御来屋礫層は河川～河口堆積層とされ、固く凝結している。その上面は、おおむね埋積谷の地形に応じて起伏しており、上面の起伏に沿ってローム層が堆積している。したがって御来屋礫層とロームは不整合であるといえる (御来屋礫層が浸食を受けた後でローム層が堆積したことを示す)。

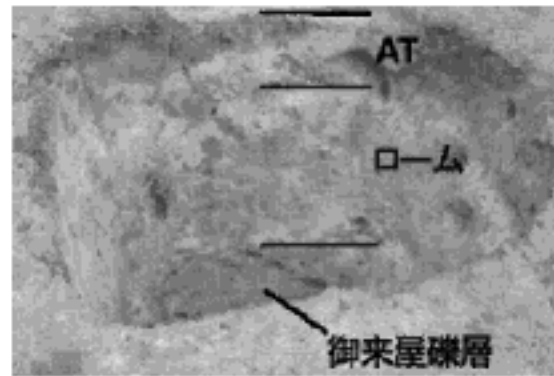


図78 門前第2遺跡 屋根部 土坑内壁にみられる基盤 (地山) の地層

(2) 門前第2遺跡の埋積谷と土層

門前第2遺跡の現地表下の2筋の埋積谷の埋積土はともに、下層は褐色系でその上に黒褐色系の土層が堆積する。埋積土の下には上記のAT層、ローム層、御来屋礫層の基盤がある。埋積土には縄文～中世の遺物が包含される。それぞれの埋積谷の層部と最下部には縄文時代の土坑があり、A・B区の埋積谷の下層には縄文時代早期の配石や土坑などの遺構群がある。弥生時代終末期～古墳時代前期および古墳時代後期の遺構面には竪穴住居、中世の遺構面には耕作痕が検出されている。

(3) 門前第2遺跡および門前上屋敷遺跡の地質と堆積の特徴 (図77 参照)

① AT層

本遺跡にみられるAT層は遺跡全面には分布せず、比較的厚く堆積する部分と全く堆積がみられない部分がある。場所により層厚約20cmの純層も観察される。その上面の多くはひび割れが入り、割れ目は褐色の粘質土で充填されている。AT層ブロック間を網状に充填する粘質土は、全体の10%以下の場所から、割合の高い場所に漸移し、ATブロックの全く存在しない場所へと移り変わる。またAT層断面には層理は認められないことから流水による二次堆積とは考えにくく、AT層は現地性であると判断した。AT層の残りのよい部分から存在しない部分への漸移はAT層の削平の過程が見えているものと考えられる。図77に示したように、門前第2遺跡では屋根部と埋積谷層部の一部にAT層の残りがよい。門前上屋敷遺跡は、更新世段丘の先端部にAT層の比較的厚い堆積がみられる。

② ローム層

AT層の下位にはロームの堆積層がある。谷部にトレンチを入れると、埋積土の下にローム層が確認される (第79図参照)。図77の模式図に示したように、御来屋礫層が開析され谷が形成された後、ローム層が堆積したことが明らかである。ロームの性格・堆積時期の詳細は不明である。



図79 A・B区谷部堆積層下のローム層

4. 地形の形成過程

(1) 御来屋礫層の隆起と開析 (10万年より以前)

河川～河口の堆積と考えられる御来屋礫層堆積以後、本地域は沈降から隆起へ変わり、御来屋礫層による台地が形成された。隆起および海水準の低下 (ウィルム氷期) の結果、流水の下刻作用が強まり、阿弥陀川や名和川などの河川が台地を開析し、大山を中心とする放射状の谷が形成された。開析谷と遺跡の埋積谷の

第10章 1 門前第2、門前上屋敷遺跡の地層の成り立ち

断面を図77で比較すると、遺跡基盤の地層はともに下位より、御末屋梁層、ローム層、A T層の順で同一である（この順は、門前上屋敷遺跡においては更新世段丘にのみ残されている）。門前第2遺跡の埋積谷の形成は開析谷形成と、ある程度の幅は想定されるが、ほぼ同時期だと考えてよい。埋積谷の出口は門前上屋敷遺跡西隣の住宅地および道路下と推定される。（埋積谷Ⅰ＊）

（2）ローム層、A T層の堆積（旧石器時代、約2.2万年より以前）

浸食された御末屋梁層上面にローム層およびA T層の堆積が引き続く（下刻の中断）。埋積谷にこれらの土層が堆積した後、下刻が復活し谷部のA T層を削削したものと推定される。名和川河床の高度は門前上屋敷遺跡の更新世段丘面であったと考えられる。（埋積谷Ⅱ＊）

なお、本調査地の約0.4km北に隣接する門前第2遺跡（西畝地区）で行われた名和町教育委員会の調査により、このローム層より後期旧石器時代に位置づけられる黒曜石群が出土した。

＊埋積谷の形成過程は少なくとも1回下刻を中断しているためⅠ・Ⅱの2時期に分けられる。上記の黒曜石群の時期は、この下刻の中断期にあたる。当該時期はその前後に比較して温暖であったと考えられる。

（3）縄文早期～（配石遺構の時期）

海水面が低位置から上昇中の時期なので、堆積作用が活発となる。この時期の遺跡の堆積面に配石遺構が作られた。接峰面図を作成し検討すると、縄文海進期には名和川河口は門前集落下流の下坪田付近にまで入り込んでいたと考えられる。この時期に門前上屋敷遺跡の上段の更新世段丘縁部まで名和川が樹方浸食したと想定される。下段の完新世段丘以下には河川堆積物が堆積した。

（4）弥生時代の堆積

本遺跡には弥生時代前期～中期の遺構はなく遺物もごくわずかである。調査地および周辺の人間活動が低下したか、あるいは当該期の土層が失われているためであろう。（土層の流失については、いわゆる弥生の小海退による下刻作用の活発化による可能性もある。）

（5）谷の埋積土（Ⅰ～Ⅲ層）の堆積

弥生終末以降は埋積土が褐色系から黒色土系に変化する。気候の安定・耕作による土壌化の促進などの原因が想定される。

5. 今後の課題

本遺跡および隣接地では幅広い時期にあたる遺構・遺物を検出したが、旧石器を産したロームについてはまだその詳細が明らかではない。ロームの母材についての分析や、本遺跡には分布しない名和火砕流との上下関係を含めて、層位を詳細に追跡することも必要であろう。また、縄文時代早期の遺構も周辺地でも検出される可能性がある。今後の調査が待たれる。（浜田）

名和町教育委員会の辻 慎広氏にいろいろご教示頂きました。感謝いたします。

参考文献

- （註1）岡田昭明（2002）名和町茶畑の火砕流堆積物「茶畑六段田遺跡」一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財報告書Ⅶ（財）鳥取県教育文化財団 pp303-304
- （註2）浜田真人（2004）茶畑遺跡群の位置と環境「茶畑遺跡群 押平尾無遺跡」一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財報告書Ⅵ 第2分冊（財）鳥取県教育文化財団 pp1-1

第10章2 大江山麓における縄文時代早期の様相

1. はじめに

今回の調査によって縄文時代早期中葉（黄島式）の配石10基、土坑8基がまとまって検出された。鳥取県内では米子市上福万遺跡において高山寺式期を主体とする配石、土坑が検出されており、量的にはそれに次ぎ、時期は一段階古いものとして注目されよう。

この時期の研究としては、北浦弘人氏、久保稔二郎氏によって押型土器の型式学的な検討がなされた（註1）ほかはなく、近年では八峰興氏が大江山麓の早期土器出土遺跡を集成している（註2）のみである。このようにこれまでは土器についてのみ着目されてきているのは、山陰地方を含めても上福万遺跡を除いてまとまって遺構が検出された例が少ないためである。ただ、本調査において遺構を検出し、また久保氏の集成以後少しずつではあるが資料も増加してきている。そこでここでは、久保氏の隔年の研究を踏まえながら（註3）、その時期的な遺跡の動態についてみていき、今回検出した遺構が形成された背景などを概観してみたい。

2 鳥取県における早期の遺構（表20、図80）

山陰において縄文時代早期の遺構を検出した遺跡は、遺物が出土した遺跡数に比べると非常に少なく、また遺構がまとまって検出される遺跡はほとんどない。以下で、鳥取県において検出された遺構のうち、早期に特徴的である「築石」についてみていく。なお、本報告書では、被熱した礫が集められたものを「築石」、被熱していない礫が主体となるものを「配石」と呼び分けた。

・配石

下部に土坑（掘り形）のあるものとないものの2種があり、前者を1類、後者を2類とする。配石はI期にはみられず、II期から出現する。門前第2遺跡では10基の配石が検出され、そのうち1類は4基（配石1・2・6・10）、2類は6基（配石3～5、7～9）ある。詳細は本文第4章に語るが、いずれも形状や規模、礫の配し方などまちまちで、一定の規則性は見出せない。また、本遺跡とほぼ同時期と考えられる長山馬籠遺跡では1類の築石02があり、径1.1mの円形土坑上面に、約0.1m以下の礫が検出されている（図80-1）。ここから1kmほど北に位置する下山南通遺跡でも、1類が検出されている（図80-2）。

続くⅢ・Ⅳ期の事例は上福万遺跡から検出され、Ⅲ期は23、Ⅳ期は8基ある（時期不明4基）。Ⅲ期では1類が8基、2類が15基（註4）と2類の割合が高く、Ⅳ期になると1類2基、2類6基とさらにその割合は高くなる。

1類では、土坑形態は楕円形が主で円形が1例のほか、「ドーナツ状」に中央に高まりがあり、その周囲を溝状に窪ませる特異な形態（築石11）もみられる。礫の在り方をみると礫が土坑上面に広がり、埋土中位以下にはみられないもの（a類、築石11・20・26・32・34、16）、底面まであるもの（b類、築石01・10・35、29）の2種類があり、前期までにみられたa類が多いことは注目されよう。また、築石32は楕円形土坑長軸の一方に立石があり、上面周囲に大型礫を配す。土坑底面は浅く2段の掘り込みになっており、墓と考えられている（図80-4）。

2類については攪乱を受けたものが多く（Ⅲ期15基中7、Ⅳ期6基中2基）、その影響を受けてい

表 20 配石・集石一覧

遺跡名	遺構名	時期	分類	礫			土坑規模			土坑形態	出土遺物	備考
				範囲 (m)	密度	大きさ・配列	長径	短径	深さ			
＜配石＞												
上福万遺跡	集石 01	Ⅲ期	1 b	0.8 × 0.7	密	拳大主体	1.13	1.08	0.17	円形	土器、磨石、砥石	
	集石 02	不明	1 a	0.6 × 0.3	粗	人頭大	—	0.51	0.18	楕円形		攪乱
	集石 03	不明	1 a	0.6 × 0.6	密	人頭大の上に拳大	1.57	1.20	0.17	楕円形		
	集石 05	Ⅲ期	2	2.3 × 2.3	密	周囲に大型礫、その中を中型以下の礫					土器、磨石、砥石、石皿	
	集石 06	Ⅲ期	2	0.8 × 0.8	密	中央に石皿、その周囲に拳大					土器、磨石、砥石、石皿	
	集石 07	Ⅳ期	2	2.0 × 1.0	密	拳～人頭大					土器、砥石	攪乱
	集石 08	Ⅳ期	2	2.5 × 2.5	粗	拳～人頭大					土器、磨石、砥石、石皿、剥片石器	
	集石 09	Ⅲ期	2	2.0 × 1.0	密	拳～人頭大					土器、砥石、砥石、剥片石器	攪乱
	集石 10	Ⅲ期	1 b	0.6 × 0.6	密	拳大～大型礫	1.45	1.04	0.36	楕円形	土器、砥石、石皿	土坑は 2 段掘り
	集石 11	Ⅲ期	1 a	1.5 × 1.1	粗	人頭大	2.75	2.05	0.13	ドーナツ状	土器、砥石	攪乱
	集石 12 A 群	Ⅲ期	2	1.5 × 0.7	密	拳大～大型礫					土器、磨石、砥石、剥片石器	
	集石 12 B 群	Ⅲ期	2	1.5 × 0.7	密	拳～人頭大						
	集石 13	Ⅲ期	2	2.9 × 2.0	密	周囲に人頭大～大型礫、その中を拳大					土器、磨石、砥石、石皿	攪乱
	集石 14	Ⅲ期	2	3.0 × 1.0	密	拳～人頭大が列状					土器、磨石、砥石、石皿	攪乱
	集石 15	Ⅲ期	2	0.8 × 0.8	粗	人頭大主体、若干拳大含む					土器、砥石、剥片石器	攪乱
	集石 16	Ⅳ期	1 a	1.6 × 1.0	密	長径 0.7 m の超大型 1、その横にやや列状に拳～人頭大	2.05	—	0.3	楕円形	土器、磨石、砥石	
	集石 17	Ⅲ期	2	1.3 × 0.8	やや粗	周囲に人頭大、その中に拳大					土器、砥石、砥石	攪乱
	集石 18	Ⅲ期	2	1.5 × 0.9	密	拳大					土器、磨石、砥石	
	集石 19	Ⅲ期	2	1.3 × 1.0	密	人頭大主体、若干拳大含む					土器、砥石、石皿	攪乱
	集石 20	Ⅲ期	1 a	2.3 × 1.7	密	拳～人頭大	1.90	1.35	0.5	楕円形	土器、磨石、砥石、石皿、剥片石器	
	集石 21	Ⅲ期	2	1.5 × 1.3	密	人頭大主体で、間に拳大					土器、磨石、砥石、剥片石器	
	集石 22	Ⅳ期	2	1.1 × 1.05	密	拳～人頭大が列状?					土器、砥石、石皿、剥片石器	攪乱
	集石 23	Ⅳ期	2	0.9 × 0.5	密	拳～人頭大					土器	SI07 に切られる
	集石 24	不明	2	1.1 × 1.1	粗	拳大主体					砥石	
	集石 25	Ⅲ期	2	1.0 × 0.9	粗	石製品主体					土器、磨石、砥石、砥石、剥片石器	
	集石 26	Ⅲ期	1 a	2.4 × 1.6	密	拳大主体で大型礫が混じる	2.50	1.50	0.5	楕円形	土器、砥石、石皿	
	集石 27	Ⅳ期	2	1.4 × 1.4	密	拳～人頭大					土器、石皿、剥片石器	
	集石 28	Ⅲ期	2	1.1 × 1.0	粗	人頭大主体で、拳大若干					土器	攪乱
	集石 29	Ⅳ期	1 b	1.5 × 0.9	密	拳大	1.75	1.35	0.4	楕円形	土器、磨石、砥石、石皿、剥片石器	
	集石 30	Ⅲ期	2	3.4 × 2.8	密	拳～人頭大					土器、磨石、砥石、石皿	
	集石 31	Ⅳ期	2	1.6 × 1.0	粗	拳大主体					土器、磨石、砥石、石皿	
	集石 32	Ⅲ期	1 a	1.8 × 0.9	粗	土坑上面周囲に人頭大礫	2.00	1.05	0.11	楕円形	土器	土坑は 2 段掘り
	集石 33	不明	1 a	1.0 × 1.0	密	拳大	0.92	0.69	0.13	楕円形	磨石	
	集石 34	Ⅲ期	1 a	0.8 × 0.8	粗	拳大	0.34	0.33	0.08	円形		巨礫に囲まれる
	集石 35	Ⅲ期	1 b	0.65 × 0.65	密	上面に拳大、土坑内に大型礫	0.65	0.48	0.23	楕円形	土器、磨石	
	集石 36	Ⅲ期	2	0.7 × 0.6	やや粗	拳～人頭大					土器	
下山南通遺跡	集石-01	Ⅱ期	1 a	2.5 × 1.7	密	拳大主体、周囲に大型礫	1.86	2.04	0.2	円形	土器	
長山馬籠遺跡	集石-02	Ⅱ期	1 a	1.1 × 1.1	密	拳大主体	1.09	1.11	0.33	円形	土器	
門前第 2 遺跡	配石 1	Ⅱ期	1 b	0.5 × 0.2	粗	人頭大	1.0	1.0	0.2	瓢箪形		
	配石 2	Ⅱ期	1 b	0.85 × 0.5	粗	人頭大	1.5	0.8	0.1	楕円形		
	配石 3	Ⅱ期	2	2.0 × 0.75	粗	拳～人頭大						
	配石 4	Ⅱ期	2	2.25 × 1.0	密	拳～人頭大が列状						
	配石 5	Ⅱ期	2	2.0 × 3.0	粗	拳大					炭化材	
	配石 6	Ⅱ期	1 a	1.2 × 0.9	密	大型礫の間に拳大	0.7	0.5	0.1	楕円形	炭化材	
	配石 7	Ⅱ期	2	1.2 × 0.65	密	人頭大の上に拳大が集中。人頭大がやや離れてある					炭化材	
	配石 8	Ⅱ期	2	0.8 × 0.6	密	人頭大主体					土器	
	配石 9	Ⅱ期	2	0.9 × 0.5	密	人頭大の上、間に拳大						
	配石 10	Ⅱ期	1 b	2.25 × 2.0	やや粗	拳大、中央に 1 点人頭大	2.3	1.1	0.1	不定形		
＜集石＞												
岸本遺跡	集石 1	Ⅱ期	2 ?	0.7 × 0.6	?	?						
取木遺跡	1 号礫群	Ⅰ期	2	0.89 × 0.8	密	拳～人頭大						
	2 号礫群	Ⅰ期	2	0.6 × 0.45	やや粗	拳～人頭大						
野口遺跡 B 地区	1 号礫群	Ⅱ期	1 a	1.2 × 1.1	密	拳大主体	1.1	1.0	0.1	円形		
	2 号礫群	Ⅱ期	2	?	?	?						



図 80 配石・集石遺構図 (S = 1/60)

ないとされるものについてみると、大型の礫を周囲に配し、その中に0.15～0.2mほどの中型礫があるもの(集石05・21、図80-5)、中央に大型の礫を置きその周囲に小型礫を配すもの(集石06、図80-6)、小型礫を主体とし密集するもの(集石18・25、図80-7)、やや疎らなもの(集石08)などやはりヴァリエーションがある。

・集石

I期に位置づけられるものは取木遺跡1・2号礫群がある(図80-9)。いずれも礫の大半が被熱し、また下部に土坑はない(2類)。1号は0.9mほどのほぼ円形に配されたもので、中心部に長径0.2mの大型の礫があり、その周囲に0.1m前後以下のものが配される。2号はやや小型で、長径0.6mの楕円形状を呈し、0.2m以下の礫が利用される。これに近接して竪穴住居と考えられるもの(竪穴状遺構)が検出されており、一連のものとして評価されている(註5)。

II期の集石は野口遺跡B地区で2基あり、どちらも礫は被熱し、径1mほどの範囲に垂から人頭大礫が密にある。1号礫群は1類で、径1m、深さ0.1mほどの円形土坑があり、この中に礫はみられない(図80-8)。2号は2類であるが、図面などが報告されず詳細は不明である。このほか岸本遺跡においても当期と推定されるものがあるが、やはり詳細は不明である。

以上のように集石はI・II期においてわずかに5例しか確認されていない。

なお、土坑についても若干触れるが、I期はなく、II期になり岸本遺跡、門前第2遺跡でまとまって検出されている。どちらも土坑内から遺物は出土しない。岸本遺跡は、丘陵部傾斜変換近くの平坦面に10基がまとまる。また門前第2遺跡では、浅い谷部下面に配石群。そこから上がった平坦部に土坑群があり、配石と立地を異にしている。一方林ヶ原遺跡では1基(第25土坑)が単独であり、埋土上層から1個体分の土器が出土している。III・IV期に相当する土坑は上福万遺跡のみで検出され、III期は34基、IV期は13基ある(時期不明5基)。ここでは配石が丘陵中心にまとまっているのに対し、土坑は広範囲に広がり、やはり配石と在り方が異なる。

3. 遺構の性格について

上記のように配石・集石について概観したが、これらを見るとまず、配石が圧倒的に多いことが特徴としてあげられる。集石は一般に炉と考えられているが、検出された遺跡は3遺跡のみであった。

配石では下部に土坑をもつかもたないかで二類に分かれる。遺構数は2類がやや多い(58.7%)。1類においては、礫と土坑との関係から二類に分けたが、a類が19基中13例(68.4%)と多数を占める。このうち大山西麓の各遺跡ではa類が圧倒的に多いのに対し、大山北麓の門前第2遺跡ではb類が多い傾向が窺える。また土坑形態では円形4、楕円形13、その他2と楕円形が多く、円形ではa類3、b類1、楕円形ではa類8、b類5基がある。

a類ではII期に円形が2例ある。長山馬籠遺跡集石02の土坑は検出面からの深さが0.35mと深い。礫は若干埋土中位にみられるものの、ほぼ上層のみにある。埋土はよく締まっているといい、土坑を埋めた後、礫を配したと考えられよう。下山南通遺跡集石01は礫の範囲は径1.7mほどであるが、それより一回り大きい径2mほどの円形土坑が下部にある。深さは0.2mほどとやや浅く、やはり上面に礫が配されていた。中央部に0.2m以下のものが密にあり、北側にやや離れ長径0.4mの大型礫がみられる。土坑埋土内には礫がなく、礫群下面レベルが揃っていることから、長山馬籠列と同様のものと考えられる。一方、野口遺跡の1号礫群は集石ではあるが、円形の土坑上面に礫が密にあ

る。土坑の深さが0.1mと浅いものの、礫の配され方は類似する。礫の底面が揃っていることから、先述した長山馬籠遺跡列のような埋設過程が考えられる。そうであるならば、このような土坑を伴う配石は墓とは考えにくい。またa類楕円形のうち礫が平面的に広がるものについても、概ね同様であろう。一方でb類は、土坑上面にあった礫が中へ落ち込んだような状況を呈しており、墓であった可能性が指摘できるように、礫の在り方から性格が異なるといえるのではなかろうか。さらに1a類は大山西麓においてⅡ期では円形が多く、Ⅲ期以降楕円形が主となるように、形態的な変化が見取れよう。

2類においては門前第2遺跡、上福万遺跡の事例から配列方法や礫の選用法など、ヴァリエーションに富むことがわかったが、これらを分類し考察するには至らなかった。ただし、門前第2遺跡では1類が谷縁辺部を主とし土坑群とともにあるのに対し、2類が谷底部に密集することはその性格の違いを反映している可能性がある。

また、上福万遺跡ではほとんどの配石中に石皿・磨石・敲石などの石製品を含む。集石の集成がなされている九州や近畿をみても(註6)こうした事例が散見されるほどである。デボ的な性格が考えられるが、検討を要する。今後の課題としたい。

4. 大山山麓における早期遺跡の動態(表21、図81)

まず、大山山麓における遺跡の分布状況をみると、日野川流域<大山西麓>、淀江平野東側に続く大山北麓の火山性台地上で、開析谷による起伏に富むところ<大山北麓>、加勢蛇川から東の倉吉平野南西縁辺部<大山北東麓>の大きく3地域に分けられる。これらは日野川中流域を除けば、概ね標高200m以下に集中する。ここでは以下、時期ごとに遺跡の様相をみていく。

(Ⅰ期)

10遺跡があるが大山西麓に集中し、各遺跡とも比較的まとまって土器が出土する傾向にある。大山西麓の遺跡群は径5.5kmほどの範囲に集中し、それぞれ1~2km離れて位置する。この中で確実に当該期に比定できる遺構が確認されているのは岸本遺跡だけで、ネガティブな楕円文や平行四辺形、格子文など出土量は山陰でも随一である。また、長山馬籠遺跡は遺物が比較的多く、土坑の中には本期に含まれる可能性をもつものもあるだろう。

大山北麓では蛇居谷遺跡が唯一の例である。この地域では中山香取遺跡を除けば、後続する時期のものよりも高所に位置することは注目される。北東麓は西高尾谷奥、取木の2遺跡だけである。取木遺跡では竪穴状遺構とそれに隣接して集石が2基検出されているが、出土した遺物量は非常に少ない。西高尾谷奥遺跡では土器がわずかに出土したのみであり、この時期大山北麓は希薄である。

(Ⅱ期)

31遺跡があり、この段階から遺跡数が増加する。Ⅰ期の大半が引き続きこの時期にみられる。大山西麓では15遺跡で、このうち遺構が検出されているものは岸本、林ヶ原、下山南通、長山馬籠の4遺跡である。Ⅰ期と同様この地域が中心と考えられ、Ⅱ期後半には山間部に入る井後草里遺跡、法勝寺川左岸の清水谷遺跡などにも広がる。大山北麓では8遺跡があるが、門前第2遺跡を除いて遺構はなく、また遺物出土量も非常に少ない。阿弥蛇川流域にまとまる傾向があり、門前第2遺跡を中心に標高670mの高所に位置する中山香取遺跡まで、垂直な分布を示す。大山北東麓は8遺跡で、倉吉平野縁辺と小鶴川上流域に分布する。前者では西高尾谷奥遺跡において比較的まとまって遺物が出土

し、後者では野口遺跡で集石が2基検出されていることから、それぞれこの小地域の中心であったと考えられる。

〔Ⅲ期〕

24遺跡と前期よりやや遺跡数は減少する。大山西麓では遺構・遺物が多量にみつかった上福万遺跡があるが、Ⅱ期に遺構が検出されたり、遺物が多く出土した遺跡の大半がこの時期に活動の痕跡がみられない。遺跡数も9と減少し、遺構数や遺物量からみれば、上福万遺跡に集中したかのような感がある。これに対し、大山北麓では10例と遺跡数が増加している。遺物出土量は非常に少なく単発的で、標高200m以下の日本海側に集中するようになる。大山北東麓では5遺跡と減少するものの、西高尾遺跡では竪穴状遺構が検出され、引き続きこの地域の中心となっているのであろう。また、より海岸部に近いところに分布は広がる。

この時期の特徴として、上福万遺跡を除き、1遺跡における遺物の出土量が非常に少ないことがあげられる。しかし破片のみというより、ある程度1個体に復元できる例が多い。これはこの段階に土

表21 大山山麓縄文時代早期遺跡一覧

No.	遺跡名	I期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	No.	遺跡名	I期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	No.	遺跡名	I期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	
1	新山山田遺跡			△		17	上中ノ原遺跡			△		34	飛渡り遺跡				△	
2	清水谷遺跡		○			18	佐川第1遺跡		△			35	石井垣城跡				△	
3	尾高御建山遺跡			△		19	岩屋ヶ城遺跡		○			36	赤坂後口遺跡			△		
4	泉前田遺跡A区		△	◎		20	大道原遺跡		△			37	上伊勢第1遺跡				△	
5	百塚第7遺跡		△			21	塚田遺跡			△	△	38	大谷(築山)遺跡				△	
6	上福万遺跡	△	○	●	●	22	荘田1号墳			△		39	大法3号墳(下層)				△	
7	岸本遺跡	◎	●	○	△	23	荘田墳墓群		△			40	西高尾谷奥遺跡	△	○	◎		
8	岸本下ノ原遺跡	△		△	△	24	蔵岡第1遺跡			△		41	上法万第3遺跡			△		
9	北田山遺跡	○	○		△	25	高田第4遺跡			△		42	森藤第2遺跡			△		
10	林ヶ原遺跡	○	◎			26	上大山第1遺跡		△	△		43	上種第6遺跡			△		
11	貝田原遺跡	△				27	蛇居谷遺跡	○	△			44	取木遺跡		◎			
12	下山南通遺跡		◎			28	茶畑山道遺跡				△	45	柴栗古墳群			△		
13	長山馬籠遺跡	◎?	◎	○		29	茶畑六反田遺跡			△		46	後口野1号墳				△	
14	鶴田上ノ山遺跡		△			30	古御堂金蔵ヶ平遺跡		○	△		47	天神野遺跡(中田地区)			△		
15	三部野遺跡		△			31	門前第2遺跡			●		48	野口遺跡B地区			◎		
16	落し原遺跡			△		32	荒田遺跡				△	49	泰久寺遺跡			△?		
17	南原第1遺跡		△?			33	角塚遺跡			△							△	
18	井後草里遺跡		○				33	中山香取(岩伏)遺跡		△								

●：遺構・遺物多、◎：遺構あり、○：遺物のみ、△：遺物のみ数点

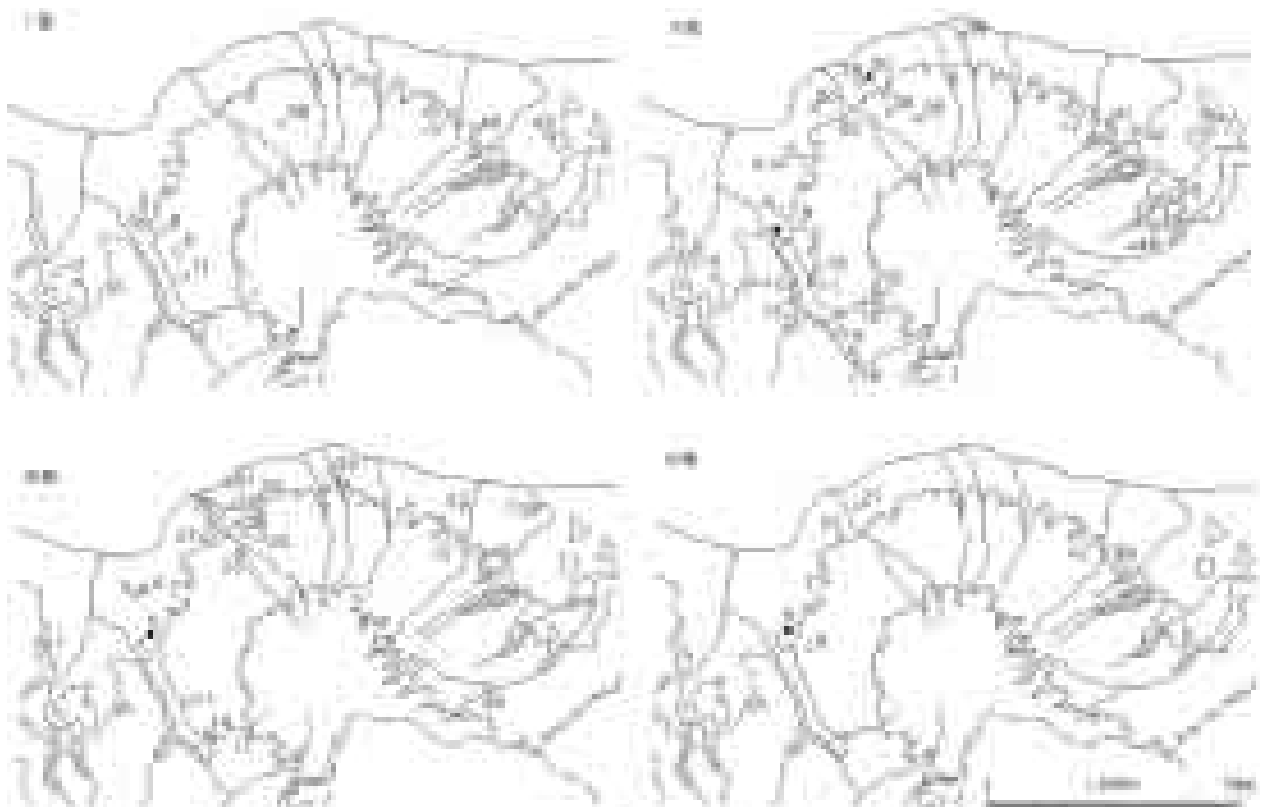


図81 縄文時代早期遺跡変遷

器の器壁が厚く、大型化しているということとも関係するのであろうが、遺跡の分布が海岸部による傾向とあわせ、大きな画期となると考えられる。

(IV期)

全体で7遺跡と大幅に減少している。上福万遺跡ではこの時期の遺物・遺構がまだ多くみられるが、そのほかではわずかに遺物が出土しているだけである。西麓では前期から引き続く遺跡で占めるが、北・北東麓の3遺跡はこの時期のみのものであり、Ⅲ期からの連続性がないことは特徴といえよう。

5. おわりに

以上、配石・集石の分類、および早期の動向について概観してきた。配石では土坑をもつ1類のうち、b類は墓である可能性がある。しかし、a類については異なる性格をもつものとして、検討を要すると考えられる。集石と形態的に類似するものがあることは、その性格を決定する上で重要となろう。また、土坑形態からみて、Ⅱ期からⅢ期において画期が想定される。このことは土器の形態・法量からいえ、さらに遺跡の分布の変化も連動していると考えられる。

今回は遺跡が集中する鳥取県中・西部域を扱った。鳥取県東部では遺跡が非常に少ないものの、その中であって智頭枕田遺跡においてⅡ期の竪穴(住居状)遺構、配石群が検出されている(註7)。ただ、詳細が不明であるため、本稿では取り上げられなかった。報告書の刊行を待って検討したい。

縄文時代早期の遺跡はⅡ期に増加するが、Ⅳ期には大幅に減少していることが明らかとなった。さらに後葉においては、上福万遺跡で平椀式が確認されているにすぎず、その様相は極めて不明瞭である。だがその後の早期末～前期初葉には、長山馬籠遺跡、名和飛田遺跡など地域の拠点的な定着性の高い遺跡があらわれるようになる(註8)。こうした歴史的な流れについても、多角的に分析をしていく必要がある。縄文時代早期の事例が少ない中で、検討の余地はまだ多く残されている。本稿がその一助となれば幸いである。

(中森)

註1. 北浦弘人 1987「大山西麓の縄文時代早期の土器について」『水曜考古談義』第1号

久保隆二郎 1991「鳥取県出土の押型文土器の様相」『鳥取県立博物館研究報告』第28号

註2. 八峠 典 2003「大山山麓の押型文土器について」『名和衣装谷遺跡・古御堂金蔵ヶ平遺跡』鳥取県教育文化財団

註3. 本稿では久保氏の設定されたⅠ～Ⅳ期の大別を用い、細分類については触れない。

註4. 調査時点で攪乱を受けているものが多いようで、配列など不明なものが多い。ここには図面、記述上取り込みがないものを含めた。Ⅳ期も同じ。

註5. 根鈴博雄編 1984「取木遺跡・一反半田遺跡」倉吉市教育委員会

註6. 九州縄文研究会編 2003『九州縄文時代集石遺構と竪穴』

菅原章太 2003「近畿「集石」研究総論」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文文化研究会

註7. 智頭町教育委員会木田真氏のご教示による。

註8. 北 浩明 2005「縄文時代早期末・前期初葉の土器と石器について」『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団
なお、参照した各報告書は紙幅の都合上割合した。御寛容願いたい。

第10章3. 門前第2遺跡配石群出土炭化材の放射性炭素年代測定

株式会社 加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。

複数回(通常は4回)の測定値について χ^2 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。

- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。

表22 縄文時代早期年代測定値

Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-41541	試料採取場所：鳥取県西伯郡名和町門前 試料形態：木炭・炭化物 試料名(番号)：No1	Libby Age (yrBP) : 8,400 ± 50 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -25.75 ± 0.64 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -648.5 ± 2.2 pMC (%) = 35.15 ± 0.22
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -648.1 ± 2.2 pMC (%) = 35.09 ± 0.22 Age (yrBP) : 8,410 ± 50
IAAA-41542	試料採取場所：鳥取県西伯郡名和町門前 試料形態：木炭・炭化物 試料名(番号)：No4	Libby Age (yrBP) : 8,530 ± 60 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -27.66 ± 0.68 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -654.2 ± 2.6 pMC (%) = 34.58 ± 0.26
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -656.1 ± 2.5 pMC (%) = 34.39 ± 0.25 Age (yrBP) : 8,570 ± 60
IAAA-41543	試料採取場所：鳥取県西伯郡名和町門前 試料形態：木炭・炭化物 試料名(番号)：No5	Libby Age (yrBP) : 8,620 ± 50 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -28.46 ± 0.65 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -657.9 ± 2.2 pMC (%) = 34.21 ± 0.22
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -660.3 ± 2.1 pMC (%) = 33.97 ± 0.21 Age (yrBP) : 8,670 ± 50
IAAA-41544	試料採取場所：鳥取県西伯郡名和町門前 試料形態：木炭・炭化物 試料名(番号)：No6	Libby Age (yrBP) : 8,600 ± 40 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -26.66 ± 0.89 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -657.3 ± 1.9 pMC (%) = 34.27 ± 0.19
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -658.5 ± 1.7 pMC (%) = 34.15 ± 0.17 Age (yrBP) : 8,630 ± 40
IAAA-41545	試料採取場所：鳥取県西伯郡名和町門前 試料形態：木炭・炭化物 試料名(番号)：No7	Libby Age (yrBP) : 8,520 ± 50 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -27.27 ± 0.90 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -653.9 ± 2.2 pMC (%) = 34.61 ± 0.22
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -655.5 ± 2.1 pMC (%) = 34.45 ± 0.21 Age (yrBP) : 8,560 ± 50

第10章4. 縄文時代早期配石群出土炭化材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

門前第2遺跡は、名和川左岸（西岸）の台地上に位置する。これまでの発掘調査により、縄文時代早期および後期～晩期の土坑や配石が検出されている。また、弥生時代終末～古墳時代前期および古墳時代後期の集落跡に伴う竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。縄文時代早期の配石や弥生時代終末～古墳時代前期や古墳時代後期の住居跡からは、炭化材が出土している。

本報告では、縄文時代早期の集石およびその周辺部から出土した炭化材の樹種を明らかにするために、樹種同定を実施する。

2. 試料

試料は、集石および周辺から出土した炭化材6点（試料番号16）である。試料は、土壌と共に採取されており、小片が複数片入っている。各試料から23片を採取して試料とした。

3. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

4. 結果

表23 縄文時代早期樹種同定結果

番号	地点	層位	遺構	時期	樹種
C1	E3		配石5	縄文時代早期	コナラ属コナラ亜属コナラ節
C3	E3	VI層	配石5	縄文時代早期	コナラ属コナラ亜属コナラ節
C2	E3	VI層	配石5	縄文時代早期	コナラ属コナラ亜属コナラ節
C4	D3	VI層	配石6	縄文時代早期	コナラ属コナラ亜属コナラ節
C5	D3	VI層	配石6	縄文時代早期	コナラ属コナラ亜属コナラ節
C6	D3	VI層	配石7	縄文時代早期	コナラ属コナラ亜属コナラ節

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、全て落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節

(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は12列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、120細胞高のものと複合放射組織とがある。

5. 考察

炭化材は、配石群周辺から出土している。炭化していることから何らかの要因により火を受けていることは明らかであるが、炭化材周辺の樫や土壌に焼けた痕跡が認められないため、配石内で使用された燃料材かどうかは不明とされている。

日本に生育するコナラ節には、コナラ・ミズナラ・カシワ・ナラガシワなどがある。全て落葉広葉樹で、冷温帯から暖温帯にかけて生育し、二次林の主要な構成種である。木材は、いずれも重厚で強

度が高い材質を有し、加工はやや困難である(平井,1979)。今回は全てコナラ節であることから、遺跡周辺に生育していたコナラ節の木材を燃料材などとして利用した可能性がある。ただし、硬い木材は燃え残り易いことが推定され、コナラ節以外の種類も利用されていた可能性もある。本地域周辺では、同時期の木材利用に関する調査事例がほとんど無いため、今後も継続して資料を蓄積したい。

また、本遺跡では、これまでに弥生時代中期および終末、古墳時代前期の住居跡から出土した炭化材について樹種同定を実施している。その結果では、スダジイやアカガシ亜属などの常緑広葉樹が多く認められ、コナラ節は1点も認められない。今回の結果は、本地域の植生変遷を考える上での重要な成果である。今後、木材利用の調査と共に古植生に関する調査も行い、併せて検討することが望まれる。

引用文献

平井 信二,1979,木の事典 第2巻.かなえ書房.

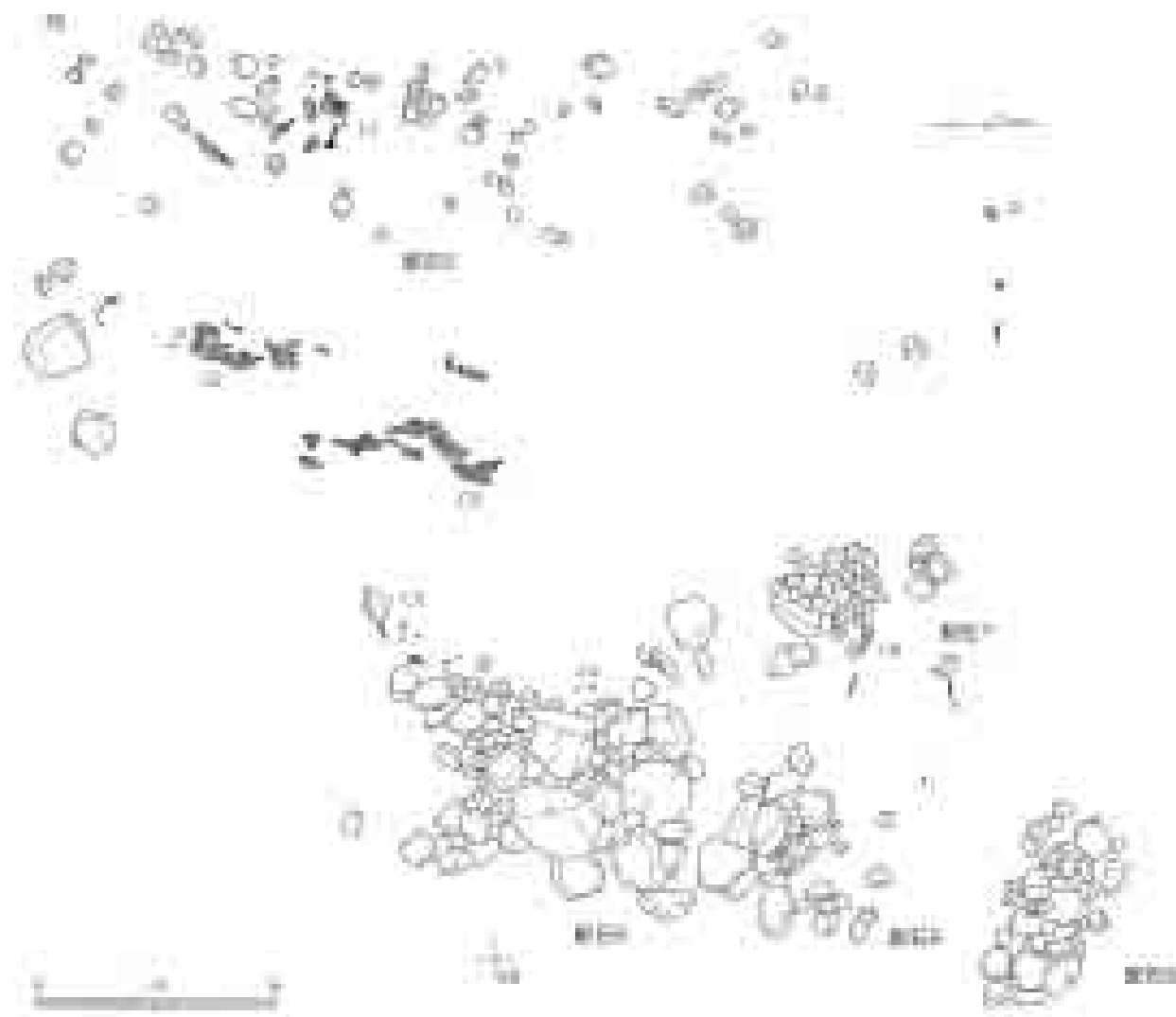


図 82 配石 5 ~ 9 炭化材出土地点